
まみれた命

巻機 鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まみれた命

【Nコード】

N5075X

【作者名】

巻機 鶴

【あらすじ】

どMで妄想癖のある恭子。ふとした弾みから、ヤクザと政治家の絡む恐喝事件に巻き込まれた。田崎は義父により政争の具にされ、命を賭けろと宣告される。ヤクザの代紋と代議士のバッチ。その重みに翻弄される恭子と田崎。裏社会を描いたハードボイルド小説。

その1（前書き）

一本のDVDのために、昨日までの日常を奪われた、恭子と田崎。真相を追い求めて、たどり着く先には何が待っているのか？物語の始まりです。

その1

窓から射し込む朝日と、小鳥のさえずりで恭子は目覚めた。

毛布にくるまって『うゝん』と伸びをする。胸元がすうすうする。見慣れぬ部屋に戸惑ったが、すぐに昨日のことを思い出した。

ベッドからは、脱ぎ散らかした服に手が届かない。ショーツだけが、届きそうで届かないところにある。無理な体勢で拾おうとしてもぞもぞしているうちに毛布がベッドから落ちた。

「あっ！」

しまった。慌て毛布を拾う。

「おはよ、きよこたん」 ベッドルームと繋がるリビング。開け放った引き戸の向こうに翔がいる。

『やだ、見ないで！』

卵みたいに丸くなり、蚊の鳴くような声で、

「おはようございます」 やつと答えた。

翔が近づいてくる。毛布の上から、お尻をポンと叩かれ「はいよ」と言っ、ブラだけを置いてリビングに戻る翔。

『えっ、これだけ？ 意地悪！ もういいもん』 開き直って服を集めた。

「もうちょっとしたら、竜とお出掛けだからな」 そうか、公園に行くんだ。時計を見ると9時15分。シャワー浴びたいと思い、恐る恐る翔に聞いてみる。

「10時に出るから間に合わせろ」

竜の車に乗り、近くの公園に向かう。

翔は居ない。竜と二人きりだ。険しい表情をしている竜。挨拶をしたきり会話は無い。他人を寄せ付けないオーラを強く感じる。居たたまらない車中の雰囲気。

竜はこれから受け取るカネにプレッシャーを感じているのか。い

や、そんな男ではないだろう。では、警戒を必要とする、恐ろしいことが待ち構えているのか。妄想癖のある恭子のそれは、公園に着くことで止んだ。

車から降りた竜。入口あたりを眺めている。煙草を吸いながら、ゆっくりと前も後ろも。付近に止まっている車も見ろ。その刺すような視線で、何を探しているのか。

短くなった煙草を踏み潰して中に入る。警戒の目付きは変わらない。歩きながらも周囲に注意を払い、一直線にあのベンチには行かない。狭い公園だが、隅から隅まで歩けば、かなりの距離になる。

例のベンチに着くと、恭子に座るよう、顎でしゃくった。竜が放つチリチリとした殺気に、恭子は緊張していた。今にも、誰かが襲って来そうで怖い。恐る恐る、恭子はベンチに座った。

竜は、無言で離れて行く。恭子を振り返ることなく、見えない敵を探し求めるように、辺りを睨みながら遠ざかって行く。

ひとり残された恭子。見知った公園が、今日はよそよそしく感じる。まるで恭子を拒絶しているかのようだ。心細さと静寂の恐怖が恭子を襲い、妄想を呼ぶ。

私は今、放り出された。姿を見せない、獰猛な何かの群れの中に。あの木の陰から、あの石の背後から、得体の知れない何かが飛び出して来て、私の顔が、腹が 足が……。襲い来る獣の餌食になる。誰も居ない公園。どんなに叫んでも助けは来ない。

後ろでガサツと音がした。肩を抱き締めて、ひきつった顔をその音の方にゆっくりと向ける。

何もない……。

『バカ！ あたしの馬鹿！ ここは公園だぞ。そんなの居るわけない！』 妄想を振り払う恭子。だが、不安は去らない。竜のあの表情……。竜さんが怖い。なんであんなオーラ出すの？ 本当に襲

われるみたいだよ。

田崎さんが襲って来るの。まさか、あの人には出来ない……きつと。じゃあ他の誰かが来るの。昨日のDVDを取り返しに来るの？ あたしはそれをおびき寄せるエサ？ エサなの。違うよね。そんな思いを竜に打ち砕いて欲しい。『なに馬鹿なこと言ってるんだ』と言って欲しい。だが、竜は居ない。

更に過激になって、妄想が蘇る。

生け贄にされる気分で、こんな感じなの……。殺されることは分かっている。けれど、どうやって殺されるかが、分からない。死ぬことよりも、生きていうちに受ける残虐な行為に、より強い恐怖を感じる。両足を切断され、手の指は一本ずつ引きちぎられる。切り取った肉体が祭壇に供えられ、それを崇める狂者ども。血だらけになって激痛にのたうち回り、助けてと絶叫する私。でも、まだ辛うじて生きている……。目を抉られ、頬を削がれ、はらわたを引き出され、もはや声も出ない。ただそこにある無惨な塊。でも……まだ血まみれで生きている。

『だめっ！ だめだめだめっ！ そんなこと考えると本当になっちゃう』

慌てて頭を振り、妄想を追い出そうとした。と、その時。

「失礼」

頭の上から男の声がした。逃げようと思ったが体が動かない。下らない妄想に耽っていた自分を恨む。こわごとと顔を上げた。

そこには、上等なスーツを着こなした男が立っていた。獣ではなかった。

男は恭子に問いかける。

「あなたは確か、昨日あの家に居た方ではありませんか？」

昨日のあの家と言えば翔の所しかない。だが、迂闊な返事は出来

ない。そう思い、困惑顔で男を見る。

男は事務的な口調で、

「田崎という名前に、聞き覚えはありませんか？」

と聞いてきた。

『ある！　あり過ぎるほどある。でも、この聞き方は何？　探られてる？』

恭子は、その場しのぎで知らぬ存ぜぬを通し、この煩わし事から逃げようと思った。だが、瞬時にその思いを否定する。

竜が麗奈が、そして翔がいる。そんなことを考えていた時。目の前の男は、

「私が田崎です」

と、驚きの言葉を発した。

『ええっ！　うそっ！　だってだって、昨日と全然違うよ！　こんなにバリッと……。絶対違うよ……。』

困惑する恭子に「失礼するよ」と声をかけ隣に座った。

恭子は、上半身を少し、男から遠ざける。

「あの家に居た方に、間違いありませんね」

念を押すように男が聞く。

「あの家って……。翔さんの家のことですか」

「そうです。あなたは、まだ私が田崎かどうかお分かりになっていないようだが……。私はあなたに謝りたくてね。私のあれが、立たなかったばかりに。あなたがあんなことするはめに……」

恭子の頭の中で、昨日のことが蘇る。自分の顔が真っ赤になっていくのが分かる。

『そうだ、昨日この人のあれを……。でも、この人が本当に田崎さん？』

恭子は、首を捻り、男の横顔を視界に入れた。

色白で、細く高い鼻。切れ長な一重瞼。冷たい印象を受ける。男の話は続いている。

「本当に申し訳ないと思っています。ご迷惑をお掛けしたこと、お詫びします」

田崎は、座ったまま恭子に向かい頭を下げた。

恭子は理解した。昨日の狂った状況と、平静を装う今日は違って見えて当たり前。まして、お互いの顔を、良く知る仲でもない。田崎のお詫びに、どう答えていいか分からず。

「あつ、いえ……」

と口ごもる。

「ところで、お名前は？」

偽名を言おうとしたが、素直に答えた。

「恭子です」

「そう、恭子さんか。恭子さんは、奴等の仲間なのかな？」

突飛な質問に驚いた。激しく否定する。

「違います！ 違います！」

「まあまあ、分かっていますよ。仕事柄、ああいった連中のことは、多少知っています。桔梗一家こましの翔、強請たかりの世界では有名なです。奴が出てきた時点で1千万は下りません。最低でもです。安い仕事はしないんです」

「はあ……」

聞きもしないことを喋る田崎。とりあえず生返事はしたものの、次の言葉が出て来ない。様子を察知した田崎は、苦笑いを浮かべ、「余計なことだったですね。恭子さんが知りたかったことではないかと思ひまして。あと、何故こんなことになったのか。何故私が、6,000万もの大金をすぐに用意出来て、素直に払うのか。興味ありませんか？」

『あります！ 物凄くあります！』

言葉には出さないが、恭子は聞きたいオーラを全開にして、田崎を見つめる。その時、

「田崎さん」

その声に反応した二人。同時に振り返る。後ろには竜が立っ

た。

何故か、恭子に強い喪失感が生まれた。待ち望んでいたはずの竜を、目の前しているのに。未だ妄想の余韻から抜けきれていない恭子。虐殺されていく自分の姿。血を撒き散らしながら苦しみ悶える。その姿を想像すると、疼きすら感じる。

『あたしはマゾ。それも重度の』確信する恭子。

同時に、田崎の話が聞けない、もどかしさも感じる。昨日、突然巻き込まれたこの出来事。どんな意図を持って仕組まれたことなのか、知りたい。なのに、今のタイミングで現れた竜は、鬱陶しく、邪魔だとすら思う。なんとも我が儘な女だ。でも、一人にして怖い思いをさせたのだからと、胸の内言い訳をする恭子。

「ご苦労だな、田崎さん。で？」

竜は、田崎のアタッシュケースを見ている。

「お持ちしました」

田崎は、それを差し出そうとする。竜は制止ながら。

「ああ、分かった。車まで持ってきてくれ。きよこたん。田崎さんを、俺の車に案内してくれ」

「はい」

田崎と共にベンチを立つ。竜は少し離れて着いて来る。険しい表情を崩さない竜を見て、二人は無言になった。

恭子は、田崎の話の続きが気になる。聞くことは危険だと分かっている。興味は捨てがたい。

『犯罪』

認めたくない言葉。昨日からずっと、心の底に潜んでいた言葉が、むくむくと起き上がる。

恭子自身も、被害者のはずである。だが、出演料として約束され

た10万円を、貰ってしまえば共犯者になるのだろう。

昨日の出来事。

恭子は、竜にぶつかって気を失った。目覚めた場所は、知らない部屋。

自分の、何も着けていない下半身。目の前で繰りひろげられる、麗奈が田崎を犯す痴態に、恐怖した。

その中に放り込まれ、DVDカメラに刻まれる恭子の姿。逃れようのない事実。

翔は田崎に、ある人から頼まれてすることだと言っていた。金を取るなどいわれたが、実費は貰うと。その額が6千万。恭子には10万円をくれると言った。

理解不能な昨日の出来事だった。

田崎と歩きながら、恭子は、妄想の世界に入り込む。必要以上に関わった結果が招くものを想像して……。

あたしはもつと知るのよ。この事件を。もつと深く、深く……。田崎さんの口から真相を聞く。そう、私は知ってしまう。そして、それが翔にばれて監禁されるの。コンクリートむき出しの廃墟に。重く錆びた長い鎖が、壁に打ち込んだ鋼鉄のフックに繋がっている。その鎖から伸びる拘束具に自由を奪われ、後ろから前から、容赦なく犯される。何度も何度も犯される。口にも突っ込まれて、頭を抑えられ放出される。穴という穴から滴る白い液……。焦点の合わない目。だらしなく開いた口。肉便器と化し、白濁した液体にまみれる、私。

そんな私に向かって、竜が『分かてるな。余計なことを喋ると。職場に……田舎の両親に……』と、お約束の台詞を投げつける。

しかも、その後ろには、澄ました顔をして椅子に座る翔と、その肘掛けにちょこんと尻を乗せている麗奈がいる。

その三人を前に、新たな男に貫かれながら、返事を強要される私。
『はっうっ……。わ・か・ひいっ・まっ・したっ』
私は被害者。哀れな被害者。

コッソコッソと恭子の肘に何かがあたる。妄想から現実に戻る。
田崎が肘で恭子をつついていた。田崎の方を見ると、何かを渡そうとしている。白いカードのようだ。

「私の名刺だ。携帯番号も書いてある。話の続きが聞きたければ電話しなさい」

前を向いたまま田崎は喋る。

『要らないです』

とも言えた筈だが、恭子は、黙って受け取った。

真っ黒のレクサス。フロントガラス以外の窓に、濃い黒のスクリーンが張られている。インチャップしたホイールが、日の光を反射して眩しい。

竜が運転席に、二人が後ろに座ると、ドアがロックされた。

「さっさと済ませるか。きよこたん、数えてくれ」

竜は前を向いたまま、恭子に指示を出す。

田崎の手を離れ、シートの上を滑るアタッシュケース。それを受け取った恭子。何気なく開けて、中を見た。

次の瞬間……。目の前に広がる万札の束。思わず息を飲み、のけぞった。口の前で手を握りしめ、そのまま動かない。

びっしりと並んだ一万円札。圧倒されるその数、6・000枚。

それが、突然目の前に現れた。

『凄い！』声にならない叫びをあげる。熱く沸き上がる気持ちだが、胸を締め付ける。ずんっ、とした疼きが下腹部を襲う。

ケースいっぱい詰められた、正しく手の切れるようなピン札。

白く細く巻かれた封緘が、100万円を示し、並んだ封緘に目を奪われた。

恭子の、強く見開かれたまなこと、小刻みに上下する胸が興奮を物語る。

「どうした？ ビビったか。まあ、無理もねえ。でも、きよこたんの金じゃねえから。只の紙切れだと思って、早く数えてくれ」

笑いながら、催促をする竜。いとも簡単に、紙切れと言い放つ。

竜の言葉で我に帰った恭子。だが、簡単に紙切れだとは思えない。札束の放つ妖しい誘惑。錯覚を起こし、あたかも自分の物であるかのように、思い込んでいた。

『そうだよ。私のじゃないよね。分かってるけど……』

未練を残し、束の間の錯覚にさよならをする。

恭子は、脂汗にまみれた手をハンカチで拭き、封緘を切らないよう、そっと束を取り出す。シートの上に500万づつ積んでいく。

1,000万、2,000万、2,500万……。

数えながら恭子は、ぞくぞくとする痺れを感じていた。胸の先がツンと立つ。強い疼きが下腹部を襲う。既に潤っているのが分かる。もやもやとした気持ち膨らんでくる。混沌とする頭の中。

恭子の背後に、顔を持たない黒い影のような男が、ぼんやりと現れた。

男は、あらぬ力でジーンズを引き裂き、恭子の臀部を剥き出しにした。ぽっくりと曝された恭子の秘所。乱暴にまさぐられた後、ずぶずぶと挿入された。徐々に早まる黒い影の動き。音のない稲妻が、恭子の背中を走る。固くしこる胸先。身を固くして、手に持つ札束にも力がこもる。激しく突かれる度に、蕩けそうな痺れが、身体中を駆け巡る。より深い快感を求め、積まれた札束の上に体を投げ出し、更に尻を突き出す。崩れ乱れたカネにまみれ、目を閉じてよだれを垂らし、悶え狂う。しかし、手に持つ金は離さない。しっかりと握り締めている。

影の男は、抜き差しを早める。二人して息を詰め、一気に登り詰

めようと、欲望のみに身を委ねる。影は恭子の腰を力の限り掴むと、恭子の中に猛烈な勢いで放出した。恭子を奥深くまで抉り、そこから放たれた熱いものは、恭子の脳天をも貫き、待ち望んだ恍惚の快感が全身を襲う。意識は遠退き、目の前が真っ白に。理性を捨てたメスと化し、恭子の蜜壺が、恭子自身が歓びに叫び狂う。

恭子の中で、どくどくと波打つ影。めくるめく絶頂に支配され、硬直する体。

握り締めた束の封緘が切れ、札束が舞い散った。

田崎の目の前で、異様な雰囲気醸し出す恭子。

乱れた呼吸と血走った目。緩慢な動作。手に持つ束に、妙に力が入っている。不自然に前屈して、腰をくねらせているる。

排泄を我慢している様に見えるが、おそらく違うだろう。

自分のカネではないと、分かっているても、手に持つことで、その魔力に引き込まれてしまったのだろうか。

時折、目を閉じて唇を噛み、吐息を漏らす。その仕草が、妖しい色香を放つ。

田崎は、代議士の秘書として、カネのやり取りに飽きる程関わってきた。

貰うばかりが政治家ではない。より良い収穫の為に、種蒔きも必要である。根回しをする人間が必要となる。その相手に、役目上必要な現金を目の前に積み、渡す。

田崎は、繋ぎ役に徹して感情は挟まない。が、相手は違う。カッと目を見開き、直ぐに手を出そうとはしない。瞬時に浮かぶ、カネの力に浸っているからだ。積まれた現金が、全て自分のカネではないと、分かっているてもだ。

さっと掴んで、飛んで帰りたい衝動を懸命に抑えている。慣れている者は、そんな反応は見せないが。気持ちを悟られまいと、わざとゆっくりカネをしまう。血走った目。ぎこちない手の動き。

恭子の見せる反応は、それを遙かに越えている。欲得にまみれた連中と違い、まだうら若い娘。いきなり、目の前に曝された6'00万。無表情でいろ、と言うほうが無理だろう。だが、この反応は過剰だ。

今日の事は、ひと時の悪夢として忘れてくれることを、田崎は祈った。

そんな田崎の気持ちをよそに、恭子は『間違いがあつては』と再び数えだした。

妄想と現を、さ迷っていた為、正確さに自信がない。痺れた体と、ぼやけた頭を覚ますように、

『いーち、にーい、さーん……』と、声を出して数えだした。

それは、更なる狂気を感じさせる姿でもあった。

その2（前書き）

理不尽な事件に巻き込まれた恭子。崩壊しかける自分自身を、妄想と開き直りでごまかそうとしたが……。恭子に、思わぬ心境が訪れた。

その2

田崎が見つめる中、二回目のカウントを終えた恭子。

「6・000万あります」

「足りねえな！」

予想もしない、恭子の胸に突き刺さる、鋭い竜の一言。金が足りないのは、恭子のせいだと言わんばかりだ。戸惑い、助けを求め田崎を見た。

「恭子さん、その茶封筒の中も」

田崎が指差して言う。恭子は、素早く茶封筒の中身を数えた。

「20万あります」

「よし！金はケースに戻しておけ」

ほっと胸を撫で下ろす恭子。

竜は、運転席と助手席の間から身を乗り出して、

「田崎さん、ご苦労だった。兄貴が言った通り、これで終わりだ。帰っていいぜ」

「分かりました」

田崎は、恭子に一瞥をくれて、車から出ていった。

茫然とする恭子。

これで終り？

警察には言うな、とか。これ以上は無理ですから勘弁を、とか言わないんですか？ 6・000万もの大金なのに。

だが、金のやり取りは、無表情に終わった。

「さて、事務所寄ってから兄貴の所だ。そのケース、こっちに渡してくれ」

初めて見た大金。錯覚と妄想。そして昨日からの出来事。それは、恭子の期待に応えることなく、何の盛り上がりも無く終わった。

気が抜けた恭子は、深くシートに沈んだ。

桔梗一家事務所。若頭安藤の前に、机を挟んで立つ竜。綺麗に並んだ札束を安藤の前に差し出した。

「田崎の件だな。予定通りか」

「はい」

「気前のいい婿さんだな」

「あっさりしたもんでした」

「そうか。うんっ……なんだこれは？」

安藤は、茶封筒の中を見る。

「この半端な金はなんだ？」

「成り行きで、紛れ込んだ女が居まして。そいつに払ってやれと兄貴が」 「その女、麗奈みたいに仕込もうってわけか」

「それは分かりません。俺が公園で隠し撮りしてた時なんです。麗奈さんと田崎を」

「公園で隠し撮り？ 随分と手の込んだ事したんだな」

安藤は興味を持ったらしく、竜を見る。

「俺は反対したんです。田崎さらって、ビデオ撮って終りにしましょうって。でも、兄貴は。いや、今回はドラマ性がないと駄目なんだ。なんて訳の分からんこと言い出しまして、田崎がたまに一人で来る公園で、麗奈さんに一芝居打たせたんです、元役者ですし」

「ほう、麗奈は役者だったのか」

「ええ、そうなんです。で、公園で田崎たぶらかして、あの家に引っ張り込む筈だったんです」

「麗奈にそんな芸当が出来るとはな。ただの淫乱じゃねえってことか」

「自信満々でした、麗奈さん。それで、隠し撮りしてたんですが。アングルにかぶって、女が入って来まして。俺は邪魔だから退けて、言いに行ったんです。他に移るのも面倒だし」

「それじゃあ隠し撮りになってねえだろうが」

「はあ……でも、蜂が悪いんです」

「なに？」

「そんな時、蜂が飛んできたんです、女のところに。その女びっくりして急に立ち上がりまして、俺の頭と、女の頭が激突です。女あ失神して倒れるし、それ見た田崎は近付いて来るし、麗奈さんには睨まれるし……」

「ぶち壊しだな」

「はい、しょうがねえから後は力業で。倒れた女心配してる振りしながら、奴の金玉掴みまして『実は、あんたに話があつて一芝居打たせてもらった。ちよいと付き合ってもらうぜ』って言って玉ぎゅつと……」

呆れた顔をしながらも、安藤は笑う。おもむろに煙草をくわえると、素早く竜が火を着ける。紫煙を吐きながら、

「お前に頼んだ翔が悪い。隠し撮りなんて器用な真似出来ねえだろ」
「はい、出来ません。それで『玉潰されてから着いてくるか、潰されないで着いてくるか、どっちがいいタ・ザ・キさん』って聞いたんです。やっこさん目白黒させて、首縦に振りました。ついでに、倒れてる女も一緒に連れて来たんです。放つといても良かったんですけど、なんとなく……」

ふんふんと頷きながら聞いている安藤。

「家に着いてから、田崎と連れてきた女、裸にしまして。兄貴が説明を始めました。『これは、頼まれてやることだ。抵抗するようなら、殺してもいいとも言われている。その場合、殺すのは俺達じゃない。いつ殺すかも、俺は知らん。ただ、あんたが主役のちよつとしたDVDを撮れば、解放する。金は取るなど言われたが、実費は払ってもらおう』そんな説明でした。田崎は、兄貴の顔じつと見ていたんですけど、だんだん表情が変わって来まして。ビビってじゃないんです。どうも兄貴のこと知ってるみたいな顔つきになったんです。兄貴もそれを感じたみたいでした。そこで、倒れていた女が目

覚まして、ああ、とか、ううっとか言っていましたけど、自分の状態に気が付いたんでしょう。泡くってま……」

「竜！」

突然、安藤が竜の話を遮る。

「竜。話が長えんだよ。もうちっと手短に話せねえのか」

安藤は、竜の話を聞くつもりだったが、だらだらと聞かされることに嫌気がさし、急に不機嫌になった。

竜の背中がピンツと伸び、顔が強張る。

「はい、すみません」

鬱陶しくなった安藤は突き放すように

「早く話せ、あと3分で」

「分かりました。すみません。麗奈さん登場で撮影開始です。田崎寝っころがして仰向けにさせると、服脱ぎだしまして黒のブラジャーとパンティ姿に。麗奈さん顔面騎乗しまして、くねくねと、こう腰動かして自分のおっぱい揉んで悶え始めたんです。ところが、野郎のなかが、ピクンども反応しねえんです。そしたら兄貴が、恭子……って名前です、その女。恭子を田崎のところに連れていきまして『舐めろ』って。女は固まってました。無理もないです。兄貴は恭子の耳元で、もごもごと、何か喋ってました。そのうち、自分のアレを、恭子の目の前に突き出したんです。おっ起ったやつをいきなり。恭子のひきつった顔見て感じたんですかねえ？ 兄貴どSだし。それとも、試したんでしょうか。でも確かに異様な雰囲気を持っています。あの女は、好きもんです。間違いないです」

竜は咳払いひとつして、話を続ける。

「恭子は、迷わず兄貴のをくわえました。手を添えて、シャブリでしたんです。驚きました。おじぎした田崎のよりも、兄貴のごつい方が良かったんですかね。兄貴には、撮影の邪魔だから離れてもらいました。その後、恭子は田崎のを」

「そういうことか」

「はい。今日、ちょっとかまってみましたが、思った通りでした」

「竜……お前。翔に頼まれて来ただろう。その女の事、俺に話してこいって」

「ばれましたか」

「あたりめえだ！ 口下手なお前がやたら喋るから、おかしいと思うだろ。だらだらと……。聞いている俺の身にもなれ、バカ野郎」

「へい、すみません」

頭を下げながら、竜は笑っている。

「恭子って女の事は覚えておく。翔にそう伝えろ。お前は3,000万置いて帰っていいぞ。茶封筒の20万は、その女にそっくりくれてやれ。分かったな」

「はい、分かりました。ありがとうございます」 「ご苦労だった」

竜の車の中で眠っている恭子。携帯の着信音で目が覚めた。抱えているバッグの中から、のろのろと携帯を取りだそうとしているうちに、着信音が途切れた。慌てる様子もなく、携帯の画面を見る。

新着メール8件、着信5件。さっきの着信、バカ店長 13..48. 最近『今日は、休んで下さい』の電話しかよこさない店長。頭にきて、登録名をバカ店長に変えた。前は違ったのに。どうせまた……。ぼやけた頭で呟き、発信ボタンを押す。すぐに店長が出た。

「もしもし、恭子ちゃん。ごめんね、電話もらっちゃって。実は、またね……。今日も、言い難いんだけど」

「分かりました。良いですよ」

それだけ言って切った。そこで初めて、隣に誰かが居ることに気づき、驚いた。ぎょっとして後退り、勢い余って、サイドガラスに頭をぶつけた。

竜は居ないが、隣に知らない男が居る。見れば、ピアスを幾つも着けた、スキンヘッドに眉毛もない、色黒のごつい男。逞しい二の腕に、雷神が描かれていた。男は怪訝な顔をして、恭子を見返してきた。

『睨まれてる？　ちょっと怖いな』

何か喋らなくては、と思うが、開いたきりの口からは、言葉が出てこない。向こうから話し掛けてきた。

「良く寝てたね。あんまり寝顔が可愛いから、食べちゃおうかと思っただけど。竜さんから『大事に見張ってる』って言われたから、我慢してあげたよ。優しいだろ、俺って」

良く見ればまだ若い、恭子より少し上くらいか。ぽんぽんと喋って、男はつまらなそうに視線を外に向けた。恭子も、男とは反対側の外を見た。そこには、もう一人見張りらしい男が立っていた。恭子の座る、左後部座席のドアを守るように立っている。

もののしさを感じ『あたしって一体何？』と思ってしまう。

車の中の男は、あれから喋らない。恭子は、手にした携帯をいじりだした。着信履歴を見て、メールを読んでいるうちに、竜が帰ってきた。

車に乗り込み、アタッシュケースを助手席に置くと、男に『ご苦労。これで上手いもんでも食え』と言って、財布から一万円札を二枚抜いて渡した。

「ありがとうございます。またいつでも声かけて下さい。すっ飛んできますから。失礼します」

深々と頭を下げ出ていった。

外に居る男に、万札を見せびらかせている。連れの男は、ばかりでかい声で、

「ありがとうございます」

と叫び、揃って頭を下げた。

そんな二人を尻目に、車は走り出す。

「奴等は、俺の舎弟だ。きよこたん寝てたから、見張りに呼んだんだよ」

「はあ……逃げないように、ですか？」

「そうだ。まあ、起きてても呼んだけどな」

その言葉に、少し気持ちが乱れた。

見張りの男は、竜から『大事に見張っている』と言われたと。逃げないように、なんて事は聞くまでもないことだった。ただ『大事に』の一言が気になる。

「信用無いですよね」

ぽつりと恭子

「なんだそりゃ」

吐き捨てるような竜の返事。恭子は、なんとなく切ない気分になった。

毎日が面白くなくて、悶々としていた恭子。バイトで思うように稼げず、生活費はピンチ。買いたい服も買えず、彼氏も居ない。くさくさしている所に『休んでくれ』の、度重なる電話。昨日もそうだった。自棄になっていたところで、とんでもない事に巻き込まれた。

『明日、カネを受け取って、戻ってきたら解放する』翔はそう言った。

どうせ帰れないなら、と開き直って一緒に酒を飲んだ。恐怖心はあったが、怯えて隅っこで小さくなってもつまらない。

飲み始めて直ぐに、恭子は、三人に惹かれていくのが分かった。ヤクザという文字は、頭の中にしっかりと張り付いてはいる。だが、彼等の愉快さ、豪胆さ、そして、開けっ広げなところに、どんどん吸い寄せられていく自分がいた。

翔、竜、麗奈への憧れを、はっきりと感じた夜だった。

楽しかった。楽しすぎた。翔や、竜や、麗奈の話が。

八百屋の前で、バナナ掴んで動かなる麗奈。買ってもいないのに皮剥いて、八百屋の親父見つめながらバナナしゃぶる話。

駆け出しの頃、言うこと聞かないでヤキ入れられて、その後3日間、舌だけで便所掃除させられた竜の話。

野球賭博で、八百長に失敗した選手を永久追放に追い込んだ翔の話。酔いの回った麗奈が、竜を巻き添えにして始めた淫乱シヨ

ーには、度肝を抜かれた。白い粉を、自身の花卉に塗り付ける麗奈の姿を見て、翔は呆れていた。翔と恭子の前で、憚ることなく快樂を貪る麗奈。竜のそそり立つ物をくわえながら。

びっくりしたり、笑ったり、怖かったり。平凡に生きてきた恭子には、縁のない話。本当かどうかも分からないが。それはあまりにも刺激的だった。

もっともつと聞きたい。もっともつと一緒に居たい。

その思いを断ち切るために、やくざだ、ろくでなしだ、と自分に言い聞かせた。あらぬ妄想も、そこから来ている。

仮に、そばに居たってあたしはこうなる。絶対なる。この人達は、あたしを人間としてなんか見てくれない。ただの道具。邪魔になったら、どこかに売られておしまい。幸せで楽しい時間なんて無い。絶対に無い。でも……一緒に居たいよ……バカだよ、あたし。

酷いことを平気でやる人達だぞ、恭子！

気でも狂ったか、恭子！

別の恭子が、必死に呼び掛ける。

車が大きく右に曲がり、恭子の体もそれに合わせて揺れる。見慣れた景色が、恭子の目に映った。だんだんと、恭子のよく知る街並みに近づく車。

『このまま行くと、お店の前通るよね。なんか嫌だな……』

左側にバイト先の居酒屋が見えてきた。

店長が店先で何かしているのを見て、思わず首を引っ込めて小さくなった。

『まさか、見られてないよね……まさかね』

「どうした」

シートに寝そべるような格好をしている恭子に、ルームミラーを覗きながら竜が聞く。

「はあ、あの、ちよつと……」

「具合でも悪いのか」

「だ、だいじょぶです」

「そうか」

車は、洒落たマンションの地下駐車場に入った。竜がセキュリティチェックのIDカード差し込みゲートが開く。

『ここには確か、常連さんが住んで居る。ばったり会ったらどうしよう』

車から降りた。電子音がピツと鳴り、ドアをロックする音が駐車場に響いた。No1のエレベーターに乗り、竜は最上階のボタンを押す。エレベーターは1階に止まり、禿げ頭の男が1人乗ってきた。男は、竜と恭子を見るときも見ないともせず、8のボタンを押した。恭子は顔を伏せ、少しだけ体を竜の方に向ける。男の顔は見えていない。

「どうした？ きょこたん」

『だめ、名前呼んじゃ』

何でもない、小さく首を振る恭子。竜の声に反応した男は、一瞬顔を向けたが、すぐに元に戻した。

「さっきから変だぞ」 男の存在など気にしないで話しかける竜。

『お願いだから話しかけないで』

またも首を振る恭子。

沈黙の後、エレベーターは8階に止まり男は降りて行った。

恭子は『ふう〜』と息を吐き、肩を落とした。

「挙動不審で逮捕するぞ」

「あつ、あの……実はあたし、すぐその『創・花膳』という居酒屋でバイトしてるんです。で、その常連さんがここに住んで居てもしかしたら、ばったり会うんじゃないかと思ってドキドキしてたんです。さっきも店の前に、店長居たし……」

「なんだ、そんなことか。意外と気が小せえんだな」

エレベーターは最上階のひとつ前で止まった。 竜は、IDカー

ドを差し込み、B2のボタンを二度押した。インターホンが鳴り、竜が応える。IDカードを抜くと、エレベーターは動き出し最上階に着いた。広々とした廊下が左に延び、その先にはドアが一つだけ。まるでペントハウスだ。ドアの脇の、アンティーク風の受話器を取り『竜です』と告げ、天井に吊られているカメラを見る。ガチャリ、ガチャリと二回音がして、ロックが外れたようだ。

中に入ると、天井、正面、左側はすべてガラス張りでテラス風に設えてある小部屋。

「わぁー！　すごい、素敵」

思わず見とれる恭子。そんな恭子にかまわず、竜は右側の壁にあるステンドグラスの嵌め込まれたドアを開ける。40畳はありそうなりビング。真っ白なレースのカーテンがガラス窓を覆い、モスグリーンでまとめられた調度品と白い絨毯が、爽やかな雰囲気を作っている。

「行ってきました」

「おおっ、ご苦労」

ソファアーに深々と座り、寛いでいる翔。

「きよこたんもお帰り」　ニッコリと、恭子を見て言う。

翔の顔を見て、ただいま、と言うつもりが、今朝は感じなかった羞恥心が急に沸き上がり、真っ赤になって俯いてしまう。

昨日は翔と……。太い翔の感覚が、恭子の中に残っていて、少し痛い。昨日のあられもない姿が蘇る。

竜と麗奈が繰り広げる、淫乱ショー。それを真正面に見ながら、翔に抱かれた。

テーブルに手をついて、快感に崩れ落ちそうになる体を必死に支えた。

麗奈は、そのテーブルの上に足を投げ出して、大きく股を広げている。麗奈の谷間で、妖しく蠢く指と襷。

麗奈は、しっかりと竜の肉棒を掴み、舌を絡め、よだれを垂らして舐めている。目は虚ろ。時折、あゝっ、ううっ、と喘ぐ。

竜は、右手で麗奈の頭を押さえ、左手で鷺掴むように麗奈の乳房を強く揉む。

恭子は、直視できずに目をしっかり閉じる。すると、意識が自分の蜜壺に集中して、快感が増してくる。何度か浅く突き、そして深く一度。その繰り返し。深く突かれるたびに、息がつまり声が漏れる。浅く突かれている時の、じりじりとした快感が脳天を痺れさせる。深く突かれた時の、圧縮した快感を欲しがり、更に尻を突き出す。

「あっ、いいっ……もっど。ああっ、だめっ……壊れる！」

翔は後ろから手を回して、肉の芽をそっと刺激する。体中にぞくぞくとした痺れが走る。もう立っていられない。ぱしぱしと尻を打つ音が早くなる。上り詰めようとして背筋に力が入る。のけ反る首と背中。

「ああっ、いくっ！ いっちゃう……」

翔に腰を支えられながら果てた。その後ベッドに寝かされ、さらに抱かれた。翔をくわえ、翔に舐められ、また果てた。

翔と自身の愛液にまみれ、恭子は狂った。自ら腰を振り、翔にしがみつき、翔を求めた。そして『もっともっど』となり振り構わずに声をあげた。

疲れきった恭子は、いつの間にか寝ていた。

「どうした、真っ赤な顔して」

翔の一言に、ますます恥ずかしくなり、竜の後ろに隠れた。

「さては、昨日のこと思い出してるな。そんなに良かったか。そうか、そうか。よしよし、可愛がってあげるから、隠れてないで、こっちおいで」

『ばか…』

竜の後ろで、小さく呟いた恭子。

「可愛いもんだな」

翔の一言は、馬鹿にしている様に聞こえた。が、なんとなく親しみもあるような気もした。

「竜、若頭なんて言った」

翔から少し離れて立っていた竜は、翔の方に歩き出す。恭子もつられて着いていき、翔の前に二人して座る。

「若頭は、覚えておく。と言っていました。封筒の中身もくれてやれと」

「よし、後は……」

翔の視線が恭子に。一旦視線を外し、竜の脇に置いてあるアタッシューケースを見る。差し出されたケースを開け、無造作に3つの束を竜の前に。竜は黙って頭を下げると、左右の上着のポケットにしまう。

翔は茶封筒を持って、再び視線を恭子に。

「はい、出演料」

恭子の前に茶封筒が置かれる。

「……」

封筒をじっと見つめる恭子。

「心配か？ これももらったら、強請の共犯になるんじゃないかって、思ってるだろ」

「……はい。その……ええっと」

「心配するな。事件にはならん。これは出演料だ。バイト代もらうのと同じだ。若頭の計らいで色もついてる。数えてみな」

恐る恐る茶封筒を手に取り、中身を出して数える。

『20万！ 全部だ。1ヶ月のバイト代より多い』

今日見てきた大金よりも、恭子にとって今の20万の方が、より現実的で理解できる。

『これでピンチ脱出』

安堵と喜びの表情が浮かぶ。手に持ったお金を少しだけ胸元に引き

寄せ

「ありがとうございます。頂きます」

頭を下げた。

翔は頷きながら。

「ところで、きよこたん。この呼び方まだらっこしいな。恭子でいいだろう」

「はい」

「よし。恭子は仕事何してんだ」

「はい、すぐそこの『創・花膳』という居酒屋でバイトしてます」

「そう、はなぜん？ 1年位前にできた居酒屋か？ あの居酒屋そういう名前だったのか。ああ、分かる分かる、一度行ったな」

「そこは、お役所関係の人達の宴会とか多かったですけど、地震の影響で……」

恭子は現状を語った。昨日も今日も休んでくれと、電話が来たこと。それが今回だけではないこと。アパートに一人暮らしで少しだけお金がピンチなこと。店長が悪いわけではないが、店長に対する不満と愚痴を。

「辞めちまえ、そんな店。俺んとこ来い」

カラオケにでも行くような、軽い口調で翔は言う。

「はいっ？ 来いって、どういう意味ですか？」

「実は、手伝いを探してる」

「手伝いって、炊事洗濯のですか？」

「違う、仕事のだ」

昨日の麗奈の姿が蘇る。無理、絶対無理。返事ができないまま翔の顔を見る。

「難しい事じゃない。ちよつとした探偵みたいなもんだ」

それも無理、探偵なんて出来ない。却下です。

できることなら、今の不安定なバイトなんか辞めたい。

ヤクザな世界と分かっているにも、翔達に憧れを抱いていることは間違いない。もう少しだけ一緒に居たい。でも、あたしにできそう

な仕事じゃないよ。ハードル高過ぎ。失敗して『だめな女だ』なんて思われたら、あたし……。

「あんまり深読みするな」

黙っている恭子に、竜が声かける。

翔は煙草をくわえながら、ソファアに深くもたれる。後は任せたと竜を見る。

「探偵なんて兄貴が言うから、考えるのも無理もねえ。やって欲しいことは、指定した人間の行動パターンを調べるだけだ。人間だから仕事してるわな、普通。寝るための家もある。休みの日は適当に何かするだろ。どんな奴でもそう変わりはしない。そんな日常の中で、仕事終わった後に飲みに行った場所、休みの日に行った場所なんかを知らせてくれれば良いんだよ。日本全国追っかける必要はない。遠出した時は、遠出したらしい、でいい。そいつの日常のパターンを見て知らせるだけだ」

恭子に少し希望が見えてきた。

「その人をずっと見張るって事ですか？」

「そういうことだ。まあ、やってみれば分かる。飽きてくる、見てるのが退屈になる。変わらないんだよ。そう思った時が恭子の仕事完了だ。ただ、そいつの身边をうろつくには、目立つ奴じゃ駄目だ。今まで若いの使ってやってたんだが、どうしても目立つ。男でも女でも地味な身なりをさせても、崩れた雰囲気は隠せねえんだ。今日恭子の見張りに付かせた俺の舎弟、あんなんじゃ、使いもんにならない。そこで、恭子みたいな可愛らしい普通の女の子を探してたわけだ。まあ、普通じゃないところもあるけどな。分かったか？」

「……はい。なんとなく」

「どうだ、やってみるか？」

ソファアにもたれた翔が聞いてきた。

「自信ないです……」

「はなっから一人でなんかやらせねえから心配するな。それに、金の心配もしなくていい。ちゃんと面倒みてやる、あっちの方もな」
また赤くなる恭子。

「だが、忘れるな。これから俺達の仲間になることが、どういふことか」

恐れていた一言を、目の前で言われ、胸を抉られる恭子。さらに翔は続ける

「一家の意味が分かるか？ 家族なんだよ、一家ってのは。本当の家族を捨てたならず者が寄り添って、新しい家族になる。それが一家だ」

穏やかに喋る翔。

「俺達には、もう行くところが無い。この家から放り出されたら、のたれ死ぬか、半端もんのカスとして、小さくなって生きるしかない。だから命懸けで一家を守る。親兄弟のために身体を張る。そしてその生業から、暴力団ともやくざとも呼ばれる。今すぐに、俺の言っている意味を、すべて分かれとは言わん。恭子はその家族になる。俺の身内になる。若頭にも話は通してある。それを踏まえて返事をしろ」

翔達に靡いていた気持ち、大きく揺らぐ。恐くて踏み出せない一歩を、踏み出せと言われている。

少しの沈黙の後。

「はい、分かりました。よろしくお願い致します」

自分でも驚くほど、はっきりした声で答えた。

「よし。そうと決まれば祝いだ。竜、すぐに麗奈呼べ」
「はい」

携帯を取り出す竜に向かって、

「その、なんだ、何とかって店……」
恭子を見る

「店の名前だ、そう、何とか」

「創・花膳」

「それだ。竜、その店に予約入れとけ、俺の名前で」

えっ！ お店行くんですかっ！

その3（前書き）

事務所に帰った田崎。昨日の事は、義父泰蔵の仕業だった。だがその目的は、誠治の理解不能なものだった。

その3

6,000万を竜に渡し、事務所に戻った田崎。議員会館から程近い場所に与えられた、誠司の個人事務所で、昨日の出来事を考える。

依頼主は、衆議院議員である、義父田崎泰蔵に間違いない。普段から『誠司君は、青臭くていかん』と、こぼしていた。それに、お灸を据えたということなのか。

義父の泰蔵から見れば、誠司は青二才でしかなのだろう。

震災後、政府の対応の遅さに、業を煮やした誠司。有志秘書連合なるものを作って、被災地に直接、物、金、人を送り込んだ。

東北大震災。激震と原子力発電所の爆発による未曾有の災害。嘆願は増え続ける。そのすべての事に即答出来ない、政府や自治体。そして、それに纏わる者達。曖昧な対応に業を煮やし、理性を捨てて怒り出す人達。願い叶わず、絶望して、自ら命を絶った人も。

法律や条例に縛られている国や自治体の金は、有力政治家といえども、好き勝手に動かすことは出来ない。ニュースでは流せない被災地の現状を知る秘書達。尽きない、悲鳴とも言える嘆願。多くの政治家がいるということは、その秘書が、政治家の数倍存在するということだ。中には、泰蔵から青二才と呼ばれている誠司のような正義感を燃やす秘書もいる。誠司が一声掛けると、あつという間に私設秘書連合なるものが出来上がった。寄せられる嘆願の多さのせいも、あつたと思う。あくまでも、親分には関係のないこと。と断りを入れて、企業を焚き付けてみる。たまには、人助けをしてみないかと。結局は、そこに頼るしかない自分達の無力を感じながら。

当然、泰蔵にも話はした。『個人的なボランティアなら良いだろう』と許しを得た。

賛同した企業からは、数億の金が集まり、当初の、被災地を直接

訪ね避難所に配ろうとした予定を変更。有名飲食店に、被災地に直接出張ってみては？ と声をかけて、資金面でのバックアップを約束する。彼らは脚光を浴び、美談としてメディアが取り上げた。

また、衣食住に関連する法人に、集まった金で援助を申し出た。

それぞれが直接被災地に出向き、物資を提供し、ボランティアとして働く。資金の出所を探られ、有志秘書連合の反乱？ と題して、新聞ネタになる直前でボツに。誠司が言い出したことだったが、誠司以上に正義感を燃やし、目立ちすぎた他の秘書達がクビになった。美談として紙面に載る予定が、その主役の秘書達が、既にクビになっている事実を報道されては、困る人が居たらしい。

もう会うこともないだろうと、彼らと酒を酌み交わした席で、『これ以上やったら殺されるな』と笑いながら盛り上がる奴等。その笑顔が羨ましくも、憎たらしくも見えた。

後は頼んだと、誠司に金を託し去って行った。

宙ぶらりんになって、使えなくなった金のほとんどは、桔梗一家に吸いとられた。まるで残金を知っているかのような要求額。翔から6,000万と聞いた時に、泰蔵の差しがねに違いないと直感した。だから、素直に払った。泰蔵には、お見通しということだろう。欲得にまみれる政治の世界で、聖人面をすることは、許されない。党の資金にもならず、票に繋がらない事に金を使うなどナンセンス。政治家はスポンサーから依頼を受けた演出家であって、表舞台に立ってはならない。ましてや、その秘書が偽善者ぶった行いをするなど、論外である。

それに時期が悪い。今後、復興に関わる、計り知れない巨額な金が乱れ飛ぶ前だ。政界の足の引っ張り合いも領ける。

泰蔵は、誠司のその行いを咎め、弁護士として生きる道を閉ざし、政治の世界に縛り付ける。と言うことなのか。

政治の世界に嫌気がさし、泰蔵の元を離れ、弁護士として生きていこうとする先々で、あのDVDがばらまかれたら。

以前、義父が誠司に、派閥の意味を知っているか？ と聞いたことがあった。知りません。と答えた。鼻で笑われ、長い説明を受けた。普段、事務的にしか仕事に接しない誠司。政治の暗部を深く知ろうとしないその態度に、業を煮やしたのか。或いは、親切に教えてくれたのか。とにかく、長い話を聞かされた。

誠司なりに整理してみると。

政権与党として長く君臨した自明党。単独議決権を武器に、立法を左右する。その傘下にいる与党議員。建設組、医療組、教育組、金融組など生活に密着する組に分かれて職務に着く。組の実力者は族議員とも呼ばれ、大企業や銀行などがすり寄ってくる。世界情勢を踏まえた国是と策。中長期的展望を知るのは、大企業にとって戦略を練るための欠かせない情報。と言うのは建前、実際は逆だ。世界情勢など大企業の方が、余程機敏に知っている。とにかく、太いパイプを作るために、惜しみ無く金を使う。

銀行連は、選挙の度に100億、200億と自明党に融通したらしい。融資ではなく融通。もし、政権がひっくり返って、自分達の言い分が通らなくなると、打撃を受けるところ騒ぎではない。負けてもらっては困るのだ。だから、必死になってバックアップする。そして自明党は、自明党を支え続けてくれた銀行だけは、潰すわけにはいかない。とてつもない借りがあるからだ。銀行連無くして、自明党の政権維持は語れない、と言っても過言ではない。

過去の不良債権処理の為、公的資金注入といって、一体幾ら注ぎ込んだか。国の財政破綻に拍車を掛ける結果を招こうとも、強行された銀行の保全。

それも、法律で決めたことだ。

また、経団連は、何十億もの札束で、議員の頬つぺたを叩いて言うことを聞かせた。そんな腐った時代もあったそう。

党自体に献金するのも影響力はあるが、融通を効かせるためには、窓口が必要。だから、党でも、市役所の案内板と同じように、組別

にして、看板を下げて分かりやすくしている。法律に従い納める献金。または違う形の献金。それぞれが、政治団体や管理団体を通じて議員の元に届く。その金すべてが、その議員のものになる訳ではない。巨大な力を持つ傘下において、恩恵に預かっているのだから、上納金を納める。新参者は古参に、或は、派閥会派の会長に。古参も派閥会派の会長に。会長は幹事長に。この図式は、やくざの組織と何ら変わらない。託された金、或は、むしろ金が上層に吸い込まれて行く。その額が多ければ有能と認められ大臣になれる。

大臣の知名度と実績は、今後の政治活動に大きな影響を持つ。金を集められない議員は、大臣にならないのだ。

派閥会派の会長は、組別に割り振られた議員を、横からまとめる人なのだ。その会派の数と実力が上納金の額に現れる。多ければ多いほど、党内での発言力は強く、大臣の数も増える。だからと言って、あっちの会派が強いから移る。というわけにはいかない。何故なら、国会議員最大のネック、選挙資金。それで世話になっているから、裏切れないのだ。当選。死に物狂いで戦ってきた選挙戦。その背中を金で支えてくれる会長。法定内で収まる選挙活動費では、勝てるものも勝てない。（法定活動費は選挙によって違う。固定費1,910万円。プラス有権者数×1,5円。衆議院小選挙区の一例）人の欲と不安はきりが無い。旨味がなければ、誰も着いて来ない。勝たせてもらった恩は、生涯忘れてはならないこと。だから、移れない。少々おかしいな政策を押し進めようとしても、会長の言うことには逆らえない。また、次も世話になるからだ。

選挙は、1落2当。激戦区では4落5当。と言われている。数字の単位は億だ。年間、経費と歳費を合わせて4,000万円以上もらう国会議員。仮に、一文も使わず4年の任期を勤めても、貯まる額ではない。だから、金をむしり取って、かき集めて、人事と金を握る幹事長に、派閥の親分に、俺は稼ぐ男だとアピールし、少しでも多くバックアップして欲しいと、着き従うのだ。

ある年度の公表された政治献金の総額は、約1,380億。政治

資金パーティーに依るものは、約142億。合わせて1,500億円を越える。衆議院議員480名。参議院議員242名。単純に割っても、1人2億は越える、現実が違う。派閥の会長クラスと、新参者では、比べ物にならないほど桁が違う。上納金を納めても、手元に残る額は恐ろしい額になる。そして、派閥の力の為に有能な人材を求め、金を注ぎ込む。

1,500億円は公表された額のみだ。その殆どの金は、票に繋がる何かに消えている。

更に、政党交付金。2005年度では、国民一人当たりが年間250円負担する約320億円の内、自明党には約165億。民事党には約110億。それも党幹事長が握り、議員に配る。使い道は自由。領収書さえあれば良い。

党内では、その派閥同士が凌ぎを削っている。いかにして、金を掻き集めるか。虎視眈々と、他の縄張りを伺い、隙あらば食ってしまおうとしている。

探すのは金、利権のみ。国民の生活など、知ったことではない。いつの時代でも繰り返してきた、内部での権力争い。長期政権による腐敗。案の定、自明党は破れた。

田崎の義父、田崎泰蔵は、激動の時代を歩んできた政界の重鎮。常に新党結成の中心となり、二度の政権奪取の立役者、剛腕大沢慈郎と共に自明、新正、新真、自佑、そして民事党と歩んできた。

民事党のご意見番と言われる田崎。当選回数12回。党要職、国務大臣を務めた実力者。そして大沢の竹馬の友。

今、その大沢に迂回献金疑惑が持ち上がり、元秘書らが逮捕され公判中。

迂回献金など常套手段。これに有罪判決が下ることは、多数の政党政治家が、犯罪者になる可能性を生む事になる。公判に持ち込まれるなど異例。

民事党唯一の派閥らしい派閥。

と言われた大沢派は弱体化するも、過去の実績からして大沢の力は到底無視できないという事なのか。それとも、何か他の理由があるのか。

数ヶ月前、泰蔵は、

「そろそろ引退の時期かのう」

と、呟いたことがあった。

「ご冗談を」

その時は、相手にしなかったが。あれは本当かも知れない。

泰蔵は、売られた喧嘩を買う気なのか。

身動きの取れない大沢に代わり、義父が動く。しかも引退してまで。それは、大沢潰しを企んだ輩を震撼させることだろう。田崎泰蔵の宣戦布告なのだから。

『そして俺が、代わりの御輿か』

田崎泰蔵の代わりなど出来る訳がない。だが、それで良いのだ。

田崎泰蔵の実力を備える必要もない。ただ、その地盤（選挙区）を同じ形式で引き継ぐ者が居れば良いだけなのだ。後は周りが勝手にやる、今まで通りに。

以前衆院選に、総理在職中に急死した政治家の26才の娘が出馬した。

結果トップ当選。後援会の面々が、全国ネットのインタビューに嬉々として答える。

「若くして未知の政治の世界に入る訳ですが、大丈夫ですか？」
記者が問う。

「大丈夫ですよ、御輿ですから。後はちゃんと私達が支えます」
大失言である。が、問題視される事はなかった。……そんなものだ。

大沢は無罪になる筈だ。大沢ほどの大物が、この虚偽記載から、更に発展して、斡旋利得や贈収賄に関わっていたとしても、その証拠など残すはずがない。歴代の検事総長が、横領で逮捕されている今の検察に、捜査力など期待できない。

些末な虚偽記載事件で、政治家本人に有罪判決が下る。その既成事実を作るとは、大沢潰しを企んだ本人の首も閉めることになりかねない、両刃の剣だ。

田崎泰蔵が闇に宣戦布告することにより、大沢に対するこれ以上の追求は無くなる。検察、政治家。どちらも、世間には曝せない事がある。

無罪放免になる大沢。

お前は、黙って大沢に付いていけ。いつまでも青臭い政治ごっこをしているんじゃない。お前が嫌う『鉄のトライアングル』は未来永劫消えることは無い。代議士制度が続く限り。今回は軽いお灸だ、自分の無力さを知るが良い。

大沢は、儂が守る。裏切る者は容赦しない。たとえ身内でも。

と、義父が語っているような気がする。

「分かったよ、おやじ」 既に日は暮れ、薄暗闇に包まれた事務所。誠司は一人呟いた。

電話が鳴った。

「はい、田崎です」

「有賀です。先生が呼びです、何分で来れますか」

「15分で」

「分かりました」

常に議員会館に詰める第一秘書からだった。

新しくなった議員会館、割り当てられる部屋の広さは100?と以前の倍以上にはなったが、全ての秘書や事務員は詰められない。

政策担当秘書や二人の公設秘書の他に、党務、財務、選対、選挙参謀、事務等様々な仕事を、事務員や私設秘書が受持つ。

大物政治家になると、選挙区に居る者も含め、議員秘書団と呼ばれる程の数になる。それらの人を抱えるだけでも、莫大な費用がかかる。

誠司にあてがわれた事務所は、議員会館から車で15分程離れたマンションにある。

田崎はヘルメットを被るとビックスカーターに跨がり、議員会館に向かう。有賀が、何分で？ と聞く時は急ぐ時。車よりバイクの方が早い。

既に慣れた道、すぐに着く。通行記章を着け、泰蔵の部屋に向かう。有賀を伴い、泰蔵の前に立った。

「来たか。早速だが、来週から地元に帰ってもらいたい」
『いきなりか』

有賀は、軽く頭を下げ出ていった。

「何年になる？」

「何がでしょうか」

「僕の秘書をしてだよ」「確か、12年だと」

「そうか、早いもんだな。まあ掛なさい」

ソファアに座る誠司。

「ところで誠司君。弁護士に戻りたいかね」

「はあ？」

何を言っているんだ、この親父は。昨日その道を絶った張本人のくせに。

「まあ、それはよい。昨日のことは、僕が仕掛けた。君も分かっていると思う。しかし、あのDVDは僕の所には、来ない」

「えっ！」

思わず絶句する誠司。

「この12年間甘やかせ過ぎた、僕も反省しとる。いい加減、本腰を入れてもらわんと困る。あのDVDは、自明党の与多君の所に行

つとる、儂の名前でな」

一体何を考えているんだ、この親父は！

「誠司君には、今週中に出来る限り挨拶回りをしてもらうわけだが。有賀と分担して、時間を調整してやるように。それとは別に……」

今日考えた誠司の予想は、ものの見事に外れた。何故、あのDV
Dが自明党の与多の所に？ 何故？ 泰蔵の話は、耳に届いていない。

「おい、誠司君や。何を面食らっておる？ こら」

優しく語り掛ける泰蔵の声に、我に返った誠司。

「あつ、すみません。余りに、予想外だったものですから」 誠司は自分の考えていたことを話した。震災後に取った誠司の行動を、咎めたのではないか。誠司が、弁護士に戻れない為の画策ではないか。大沢の件は、云々と。

泰蔵は、それもないこともない。と、否定とも肯定とも取れる言葉の後に、

「与多君の所の高橋に、今すぐアポを取りなさい。今日中が無理なら、明日の朝一番に。DVDは彼のところにある」

驚いているだけでは、しょうがない。後は、泰蔵に成り行きを任せるしかない。

「はい」

素直に返事をして、ポケットから携帯を取り出す。数回の呼び出し音の後に、

「どうもお久しぶり、誠司さん。高橋です」

「こちらこそ、ご無沙汰してます。今電話大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ」

「実は、うちの田崎から、与多先生に伝言を預かりました。取り急ぎ高橋さんに伝えたいと思い、電話した次第で。今日中に何とか時間を割いてもらえませんか？」

「偶然ですねえ。私も今日、田崎先生から預かり物というか、頂き物が有りましてね。今興味深く、一人で見ていたところです。良か

「だったら、ここに来ませんか。六本木のマンション、ご存知でしょう」
「はい分かります。一時間後では如何でしょうか？……はい、分かりました、では後ほど」

携帯をポケットにしまいながら泰蔵を見る。少しの間後、泰蔵は語り出した。

「いいかね、誠司君。君は今から、儂の後継者として動くことになる。これから儂の言う事を、肝に命じておきなさい」

「はい」

「儂の引退の意味は、君の思う通りだ。これで大沢に対する追求は止む」

「はい」

「大沢の件で、次は俺か？　と日々戦々恐々として暮らしたくはあるまい、議員として人の子だ。『検察の勇み足だった』で終りになる」
これは外れていない。

「ただ、うちの党首と与多が、困ったことになっている」

大沢派の弱体化を計る為に、仕組まれた裁判であることは分かる。だが、その隙をぬって、党首であり現総理の幹が、自明党と手を繋ぐとは考えもつかなかった。一度冷めた、大連立を復活させるつもりなのか。

「党首自らが、安直な保険を掛けるのはけしからん。勿論、幹一人の考えではないがの。そこで、幹の自明党への窓口の一つを塞ぐ。与多がこれ以上ちょっかい出せんように、爆弾を送った。必要なら、他にも送る。それが、君のDVDだ」

「……？」

爆弾ではなく、起爆装置を送ったのでは？　無言で泰蔵を見つめる。

「再来年の総選挙。田崎誠司の選挙活動中に、なんならかの形で、あのDVDがリークされる。田崎誠司は終りだ。そして、儂の地盤も無くなる。良い話じゃないか。与多が泣いて喜ぶ」

「……」

「ところが、そうはならん。保険でもう一人の候補者を、無所属で立てておく。儂の票は、そっちに全て流れるから当選する。儂の地盤は守られるから問題はない」

はて？ おかしな話をする。醜聞ネタなどに、田崎の票は動じないということか？ それに、

「あの……。その時、私はどうなっているのでしょうか？」

「そこだよ、問題は」

泰蔵の目の色が少し変わる。

「与多君に送ったDVDには、多少の細工がしてある。だから、根も葉も無い嘘だ、でっち上げだと否定出来る。だが、混乱は招く。短期決戦では許されない。本人かどうかが問題ではない。本人かも、だけで君は間違いなく落選する。だから君には死んでもらう」

「はあ？ 本当に、ですか？」

「ああ、本当だ。週刊誌の類いなら、発売前に情報が入る。君の件が、記事になると分かった時点で潰す。儂の可愛い娘婿の醜態は晒したくないからの」

死んでもらう？ いきなり何を言い出すのか。この親父、耄碌したのか。それとも、狂ったか？ 呆れて下を向く誠司。そんな誠司に構わず、泰蔵の話は続く。

「敵さんも、そんなことは承知だ。だが、ネット配信の場合、事前には止められん。少しの間世間に曝す事になるが、発覚した時点で死んでもらう。疑惑が残るような死に方はさせんから心配するな」
そんな心配はしたくありません。だいいち、そのタイミングで死ぬことが、一番疑惑。と言うより、認めたことになります。頭を上げ、首を傾げて泰蔵を見る。支離滅裂な筋書きだ。やはり、耄碌したのか？

「これで、奴等の企みは成功したかに思える。自明党陣営は『お悔やみを申し上げる』と言いながら万歳しとる。何せ本命が死んだんだからのう。そこで、田崎陣営はどうする？ そのまんま尻尾巻いて消えるのも芸がない。弔い合戦と称して、無所属候補の応援に

まわる。結果は、当選というシナリオだ」

まったく理解出来ない。晒し者にしようとしている事。それが現実になると殺される？死ぬ？要するに、生きてはいない。そして、その後に展開する陳腐なシナリオ。馬鹿馬鹿しい限りだ。田崎の地盤を守るためだけなら、あのDVDなど邪魔以外の何物でもないはずだ。

「先生、私には理解出来ません」

「そうか、無理もない。自分の死を、冷静に受け止めるなど出来ない。だが、君はまだ生きている。その生きている頭で、儂が何故『爆弾』と言ったか考えなさい。スイッチを押した時に、砕け散るのは君の体だけではない。現実に起こりうる最悪のシナリオだ。儂として、こんな茶番は望むところではない。だが、儂が何故こんな下らん事を言うのか。誠司君に理解してもらわんと、先には進めん。答えは簡単だ。少し考えれば直ぐ分かる。さつ、時間に遅れるぞ。もう行きなさい」

時計を見て、はっとする誠司。

「先生、高橋さんには何と言えば良いでしょうか」

「地元に戻ります。その一言で良い」

「はい、分かりました。失礼します」

一体何を考えろと言うのか。幼稚とすら思える話の内容に、誠司は怒りを覚えた。

「馬鹿馬鹿しいったらない！」

外に出て、誠司は吐き捨てた。

だが、その後で。政治の世界に居ながら、どろどろとした部分から目を、敢えて背けてきた自分を強く感じた。

泰蔵は、甘やかせ過ぎたと言った。それは、誠司も分かっている。泰蔵の一人娘の婿として、周囲は、誠司を後継者として見ている。そんな思いを跳ね返したくて、政治などには興味の無い振りをしてきた。だが、この国に生きるものとして、今の政治の在り方に、人一倍憤りを感じている。しかし、自分一人気張ったところで何が出

来る。簡単に諦めて、目を背けていただけだ。不貞腐れた日々を送っている、と言われても反論は出来ない。そんな誠司を、強制的に引きずり込もうと、泰蔵は動いたのだろう。

あのDVDが、世間に曝されたら、死ぬ。繰り返し考えても、やはり理解は出来ない。

もやもやした気持ちを抱えて、高橋の元へ急ぐ誠司だった。

その4

自明党与多喜一、二世議員。新潟出身。首相を務め、良くも悪くも数々の伝説と共に、地元では神とまで崇められた故与多覚英の息子。その喜一の選挙参謀を勤める高橋は、時代の流れを痛感していた。

誠司を待つ間、とりとめのない思いを巡らせていた。

果たして自明党は惨敗の屈辱は晴らせるのか。

民事党が自滅しようとも、自明党自体が変わらなければ同じことを繰り返すだけだ。

数年前には想像も出来なかった自明党下野。戦後二度目の屈辱を味わった。

変わらないと信じていた者達の危惧は、投票率にあった。

政治家不信が続く今、誰がなっても変わらない。そんな諦めから、投票率は低下。民意が充分に反映されないまま議席が決まる。投票率が低ければ大きな組織票を確保している候補者は優位になる。

しかし、自明党への不信感。更に、無党派層の動きが票読みを困難にした。

沈黙していた票が求める先は変化。バブル崩壊後からの自明党政策が、諦めていた彼らに火を付け怒らせた。その答えが下野。

自明党に限らず、宗教団体をバックボーンにした政党も議席を減らした。理由はやはり同じ投票率。

強い結束力を持ち、絶対数を確実に積み上げてくる。が、投票率が上がれば上がる程その力は薄れてくる。

自明と連立を組んでいた影響もあり、沈黙していた票は彼らを当然支持しない。組織の絶対数が変わらない中、苦戦を強いられる。そして落選。

結果、民事党は勝った。民事党が打ち出した政策に僅かな望みを

託して票は投じられた。政策に命を懸ける。その強い信念が実を結んだと言える。変わらないと思っていたものが変わった。

政策や理念無くして政治は語れない。地盤、看板、鞆は、その政策実行の予感と実績の上に成り立っているものだ。一朝一夕に出来たものではない。だがしかし、確固たる主権者の意思には勝てないということだ。

いずれ解禁になるであろうネット選挙。投票率の低い若い世代にはテレビや新聞同様、否それ以上に馴染みあると思われるインターネット。その世代が政治に興味を持って、しがらみの無い己の意思で一票を投じる時に、ネットの影響力は計り知れないものがある。そして、その時、最重要視されるものは一体何か？

最も解釈が曖昧な法律とも言われている公職選挙法。その隙間をぬって、政治活動の名の元、選挙運動の方法や活動を指示してきた俺のような選挙ゴロは、必要無くなってしまいかもしれない。

と、高橋は感じていた。

理念と情熱を、駆けずり回って自らの足で伝える時代は終わるのか。

選挙自体の在り方も、変わろうとしているかも知れない。

時間通りにマンションに着いた誠司と、例のDVDを挟んで向かい合う高橋。早速、切り出した。「田崎先生の伝言は何ですか」

「はい。実は私、地元に戻るようになりました」　さらりと言う誠司。

「なるほど、次期は誠司さんか。怖いな」

「何がですか」

泰蔵の娘婿でしかないのに何が怖い？　何も出来はしない私が怖い筈はないと、誠司は思う。

「これに写ってるのは、誠司さんですね。ちょっと細工してありま

すけど。田崎泰蔵の名前でそれ以外の物、送ってくるわけがない」

DVDをトントンと指先で叩く高橋。

「そうです、私です」

「だから、怖いんです」

「ですから、何が怖いんですか」

「分からないと、惚けて来いとも言われましたか。狸と狐の化かし合い以下ですよ」

「本当に分からないですよ」

「まったく、ご冗談を。僕は与多の所の選挙屋です。だから、これが送られて来た。誠司さんは、まだ一秘書だ。今これを公表したってどうってことはない。違うと言う必要もないし、スキャンダルにすらならない。ですよね」

「まあそうです」

「ところが、立候補した瞬間から、こいつが生きてくる。選挙戦が始まれば、何時でも良いですね。これが世に出た時点で、あなたは、当確でなく落確です。大本命が落選するんです。他の陣営は大喜びしますよ。だけど、そんな美味しい話がありますか？」

「田崎は、現実に関わり得る最悪のシナリオと言っていましたか」

「まあ、こんなものわざわざ送ってくるんです。手は尽くしてあるんでしょう。勿論、このDVDは与多に届けますが。出来れば返したい。今すぐあなたに」

「何故です」

「義理の息子とはいえ、田崎先生も恐ろしいことをする。誠二さんを生け贄にして、与多を殺すと言っているんです。勿論、政治的にですよ。大沢から手を引け、幹にちょっかい出すな。そういうことですか」

「分からない。このDVDで、何故そんな話になるのか」

「どうやら誠司さんは、本当に分かっていないらしい。おめでたいというか、なんというか。与多を潰す用意がある。そういうことですよ。簡単なことです」

「あっ……」

呆れ返った高橋は席を立つと、一升瓶を持ってきた。誠司にも、と聞かれたが遠慮した。高橋はグラスに注いだ酒を煽って飲み、口を拭う。

「いいですか。このDVDを公表した時に、与多の何か、も公表されるんです。致命的な何かでしょう。それが分からないと打つ手がない。田崎先生はあなたを失うが、地盤は失わない手立てはしてある筈だ。思い当たる節もある。かたや与多は、再起不能に追い込まれる。もう材料はある。ということですか」

一旦言葉を切り、手酌でグラスを満たす。舐めるように酒を飲みながら、ぼんやりと一点の空間を見ている。その材料は何かと考えているのだろうか、暫く沈黙する高橋。再び口を開いた。

「政治家なんて、無尽蔵に埃を吸い取る畳みたいなものです。それが、ずらっと国会に敷き詰められている。その上を、いろんな人間が歩くから、埃が舞います。そのうち、誰の埃か分からなくなる。中には、意図的に外に出す埃もある。マスコミは大騒ぎする。誰かが責任を取らされる。前々からターゲットにされていれば逃げられません。証拠が有るか無いか分からなくとも、マスコミが徹底的に一人を攻撃すれば世間は信じます。そうやって有罪になった人を、或いは、本当に死んでしまった人間を知っているでしょう。それを与多に仕掛けると言っているんです。とかげの尻尾切りで、捜査打ち切りになった事件など掃いて捨てる程あります」

誠司を嘲るように語る高橋。言われて見れば何のことはない。幼稚なのは自分だと気づき恥ずかしくなった誠司。思わず余計な事を喋ってしまった。

「そうですか。実は、DVDがリークされた時点で、死んでもらうと言われたものですから。それから……考えることが出来ませんで。恥ずかしい限りです」

さして驚く様子もなく、むしろ疑いの目をする高橋。

「先生は、そんなことまで言いましたか。選挙無効になる可能性も

ありますね」

そう言って、顎に手を当てて考え込む。なるほど、ふむふむ、な
どとぶつぶつ言っている。昔の……か。貧乏……だな。まあしょう
がないか。と聞き取れない呟きをした後誠司に、一つ聞きます。と
前振りを入れ、真っ直ぐな目向けて聞いてきた。

「誠司さんは、政治家として田崎泰蔵の後を継ぐ気はあるんですか」
泰蔵の言葉に従い、漠然と継ぐとしか思っていなかった誠司。物
言わぬ御輿になればいいのだと。

ところが、政治家としてその気があるか？ と聞かれ言葉に詰ま
った。少し考えて、正直な気持ちを伝えた。

「成り行きでこうなっています。本当のところは分かりません」

それを聞いた高橋は、途端に不機嫌さを顕にした。

「所詮そんなもんですか。とんだ甘ったれの青二才だ。田崎先生が
嘆く訳だ。私の所とあなたの選挙区は違いますが、岩手五区を激戦
区にして差し上げます。否、放っておいてもそうなる。そして岩手
五区は自明が取りまます。あなたのような、なんの覚悟も信念も無い
輩を相手する事自体、馬鹿馬鹿しく思いますけどね。しかし、この
DVDの話は別です。田崎先生が、本当に与多を潰す筋書きを用意
しているのか。或いは、ハツタリなのか。私には分からないし、判
断することでもありません。黙って与多にこのDVDを届けるだけ
です。ただ、田崎先生に伝えて欲しい。DVDは大切にしますと。
そして、与多は殺させませんと高橋が言っていたとね。頼みました
よ」

激昂するかに見えた高橋。だが、冷静さは保たれ徐々に静かな口
調になっていった。その静かな口調に気圧された誠司。突き放され
た気分になった。

返す言葉も無く、話は終わったのだらうと思い、

「伝えます。では、失礼します」

立ち上がり、背を向けて帰ろうとした誠司に、高橋は低い声で言
葉をぶつけてきた。

「本当は、誠司さんに言ってるんだ」

「えっ？」

振り返り、高橋を見る。

「今僕が、DVDは大事にするとと言っても誠司さんは顔色一つ変えない。あなたを馬鹿にしても、選挙は激戦になると言っても、まるで他人事の顔をしている。高橋ごときが何をほざいても、俺は田崎泰蔵の跡取りだから何事も無く当選する。そう思ってあぐらをかいて居るんじゃないですか」

座ったまま誠司を刺すように見る高橋。

「いいですか。誠司さんを生かすも殺すも、私次第なんですよ。このDVDにどんな謎かけがあるのか、どんな事態を引き起こすのか、今は定かではないですが。仮に、与多が引退したらどうです。田崎先生に出来る事は与多にも出来るんです」

愕然として立ち尽くす誠司。

「少し話しておきたいことがあります。座りなさい」

与多が引退すればあのDVDは何の価値もなくなる。引退して、ただの人になった元議員を追い込んでも一文の得にもならない。一方的に不利になる誠司。

その先に待つものは死。

誠司は力なく座った。

高橋はグラスを持ってきて酒を注ぐと、無言で誠司の前に置いた。断れそうもない、むしろ飲みたい。誠司は飲んだ。

朝から何も口にしていない腸に酒が染み渡る。息を深く吐き出した。

泰蔵や高橋の話を拒んでいた気持ちが薄れていく。

飲み干したグラスにまた注がれ、誠司も注ぎ返した。

さっきまでとは違った雰囲気生まれ、高橋は諭すように話し出した。

「僕は志のない人間が大嫌いだね。誠司さんのような甘ったれが、涼しい顔してバッチを付けることは許しません」

高橋は誠司を睨む。

「田崎先生は、大沢さんと共に改革を目指して泥にまみれて生きてきた。その信念も味わった屈辱も知ろうともせず、政治家というだけで軽蔑し、その秘書を務めているにも関わらず、私は清廉潔白だと言っているのが誠司さん、あなたです。震災後に取った行動が、それを物語っている」

的を射た辛辣な言葉。高橋は尚も続ける。

「政治の世界は嫌だと駄々を捏ねていたくせに、成り行きでその後を継ぐと言う。今まで取ってきた態度など関係ない。義父の命令だから関係ない。ふざけた話だ。そして、当選して当たり前だと思っている。馬鹿馬鹿しいけれどその可能性は高い。あなたの様な無節操な男でもね。次期総選挙で民事党は負けるでしょう。でも、田崎の看板には負けない力がある。何故だか分かりますか？」

誠司は答えられない。黙って首を振った。

昨日からの出来事に翻弄され、身も心も疲れきっていた誠司。

泰蔵が意図して与えた仕打ちとも思えるこの二日間の出来事。そのダメージは大きかった。

情けない場面が蘇る。ただの道具としてDVDに修められた己の痴態。

何の抵抗もしなかった不甲斐なさ。

『殺す』ヤクザから、そして、義父からも言われた言葉。脅しと、描かれたシナリオの中の死。どちらも現実にはならないだろうと思っても、殺れるものなら殺ってみろ。とは言えなかった。

そして、震災で苦しむ人達へと善意で寄せられた大切なお金。使うことも、返すことも出来なかったとはいえ、6,000万もの大金をヤクザに払ってしまった。

正義感に駆られて始めたはずが、自ら貴重なお金と善意をどぶに捨ててしまった。あの時、他の選択肢はあったはずだ。なのに、一番楽な方法を選んでしまった。どう償っていいのか分からない。企業にも、被災者にも顔向けできない。偽善者。そして最低な男。

心に重く濁るものを抱えながらも、氣丈に立ち振舞おうとしていた。

そこに追い討ちをかけるように、誠司の胸に突き刺さる高橋の言葉。触れて欲しくない所を抉られた。最早怒る氣力もない。

伸ばそうとしていた背中から力が抜けた。誠司は観念したように喋りだした。

「このDVDは、昨日撮られたばかりの物です。その後ゴタゴタがありまして。私なりに何故こんなことになったか考えてはみたんですが……」

脱力した誠司は酒を飲み干して、大きく息を吐きグラスを持ったまま続けた。

「予想は外れていました。しかも、DVDは与多先生の元に送ったと。そして、いきなり後継者として動け。DVDを持つ高橋さんの所へ行け。目まぐるしく変わる展開に思考が追いつきませんでした。今まで青臭いと言われ続け、余計な口出しや行いしかしてこなかった。今日そのツケを払えと言われているようです。さっき高橋さんは、他人事のような顔をしていると言いましたが、その通りです。ですが、高橋さんを見無視した態度ではないのです。壊れかけた自分を隠したかったからです。そこは分かって下さい」

理解を求めるように高橋を見る。そして、

「私はこれから何をすれば良いのか、さっぱり分かりません」

そう言うってから高橋の注ぐ酒を受けた。

「往生際が悪いですね」 誠司はテーブルを見つめながら呟いた。

高橋は穏やかな顔をして頷き、

「正直な気持ちとして聞いておきましょう。もしかしたら田崎先生は、誠司さんの青臭い所に何かを感じているかも知れませんね」

高橋は、何かつまみあったかな？ と言って立ち上がった。

自分の鳴った腹を押さえて恐縮する誠司。

高橋は、贈られて来たものだと言いながら、佐渡の烏賊一夜干しと村上鮭の干した物を炙って出してくれた。

香ばしい匂い、噛み締めるごとに深い味わいが口の中に広がり、思わず「これは旨い！」と口をついて出た。

高橋の作った旨いつまみ、そして酒が、誠司の気持ちを少しだけほぐしてくれた。

高橋は昔の話ですがね、と言って誠司に語り始めた。

「大沢慈郎。田崎先生の竹馬の友。そして、その田崎泰蔵が身を引いてまでして守りたい男。羨ましいですね、二人の絆は。大沢さんは、与多の父覚英の前に立った日から政治の道を歩み始めたんですよ」

この鮭のハラスは好物だと言って一口かじり話を続ける。

「当時は多かったそうです、弟子にして下さいと、時の首相与多覚英を訪れる男達が。そして、覚英さんはその男達に必ず言う台詞がありました。『戸別訪問三万軒。辻説法五万回やってこい！』 何とも恐ろしい話です。何人の男が出来たか知りませんが、大沢さんはそれを済ませて、再び与多覚英の前に立った一人だと聞きます。恐らく田崎先生もそうではないかと」

誠司は身の引き締まる思いがした。想像もしなかった二人の過去の姿に、自分を重ねて見ると。

たった一人で街角に立ち、背中を支えてくれる者もなく、孤独に耐えながら、流れる人や車に向かって何やら喋ろうとしている。だが喋れない。通行人のふりをして人混みに消えたいくなる。だが踏み留まって無理矢理声を出す。その姿を想像しただけ足がすぐみ緊張する。蔑まれた視線を受ける自分しか見えてこない。誠司はそこで語る理念が無いことに気付いた。そして度胸も。それを五万回繰り返した二人。踏み出す勇氣と勢いだけで出来ることではない。

「まあ、それが出来たから国会議員にしてやる。何て話じゃないんですよ。そこから可能性が生まれる。という事なんです。根性を試しただけですかね。その後お二人とも政治家を続けている」

高橋は誠司の様子を伺うように一息入れる。
「とても出来そうありません」

予想通りの残念な答え。高橋は無言の時間を流す。俯く誠司から視線を外すことなく、静かに見ている。一分、二分、その僅かな沈黙に堪えかねて誠司が口を開いた。

「高橋さんは、私にそれをやれと言っているのですか？」

高橋は軽く手を振り、にこやかに否定する。

「いえいえ、違いますよ。そういうこともあったという話です。ただね、これから誠司さんが立つ五区で、それらしき事を始めた青年が居るらしい。後ろ楯は田崎先生のようなだと聞いたので、おかしいかと思っていました。でも、何となくですが見えました。誠司さんも、うかうかしていませんね」

絵空事だと思っていた泰蔵のシナリオは、既に動き出していた。

その5

午後5時のオープンに向けて、仕度に追われている創花善のスタッフ達。

電話が鳴った。

「お電話ありがとうございます。創花善、田村が承ります」
店長が出る。

「6時半に4人だ。一番良い席は空いてるか」

「はい、ご用意できます」

「祝いの席だ、粗相が無いように」

「かしこまりました、お名前をお願い致します」

「三軒寺の上杉だ」

店長の田村に、緊張が走る。

三軒寺とは、桔梗一家の事務所がある場所。その上杉、と言っている。田村の脳裏に、オープンした日が鮮明に写し出された。

「はい、上杉様ありがとうございます。お待ちしております」

「適当に、何か見繕っておいてくれ」 電話が切れた。

あの時の上杉様が来る。

忘れもしないオープン当日。

満席の店はごった返し、スタッフは駆けずり回っていた。

シュミレーション通りの作業が出来ず、流れが悪い。

クレームも多々あった。

悪いことは重なるもので、同じお客に粗相が重なった。そのお客が上杉。翔達だった。

遅い、生焼け、違う飲み物と料理など、目を覆いたくなるほどだった。

強面のお客が、暴れるでもなく、罵声を浴びせるでもなく、静か

に間違いを指摘する。

お詫びをしても、うんともすんとも言わないし、顔も見ない。すぐにお持ちします。と言うと、もう要らんからと言って、手振りであっち行けされる。

中には、小指の先が欠けた者も居る、不気味な静けさを保つ5人組。

これ以上、何かあってはいけないと、過剰に気を使う田村の言動は、余計に緊張を増やしたただけだった。

バイトの女の子は、怖くて近づけないと言い出した。

店のスタッフの一人が、上杉の顔と名前を知っていて、ヤバいと頻りに繰り返す。

改めて対応を考え、思いきって、料金をもらわないことにした。会計時にもお詫びして、その旨を伝えた。

すると、レジの前で財布を出した、竜と呼ばれていた男が、「そうか、じゃもう一杯ビール飲むから、ここに持ってこい」と言った。

ジョッキを手渡すと、頭からかけられた。

「これは、俺からのオゴリだ。

それとな、俺達は物乞いじゃねえんだ。飲んだり食ったりした分は払うぜ。なめた真似してねえで、さっさと勘定しろ」

ジョッキがコッソリと鼻に当たった。そして壁に投げつけられ、派手な音をたてて割れた。

田村は驚いて、鼻を押さえながら、壁と破片を見ているうちに、男は、5万円を置き、

「釣りは要らねえ」

と言って、静まりかえった店を出ていった。

忘れられないオープン初日。

恭子がバイトする前の話だ。

田村は、ホールスタッフを集めた。

29番の個室に入る上杉様は、最優先の赤丸チェックだ。初日ビル事件はみんなも知っていると思う、そのお客様が来る。くれぐれも粗相の無いように！ よろしくお願いします。と声を大にして伝えた。

調理場に行き、29番はスーパー赤丸チェック。他は捨てても良いので、最優先でお願いします。と頼んだ。

店を開け、慌ただしく時間が過ぎていく。

6時を過ぎ、客席は七割程埋まり、賑わいを見せている。

6時半が近づくにつれ、緊張が高まる田村。

いつも通りに接客すれば大丈夫。と何度も自分に言い聞かせる。入り口に立ち、上杉達を待つ。

がらがらと戸が開いた。

「いらっしゃいませ！」

ホールスタッフの元気な声が、上杉達を迎える。

翔に優しく肩を抱かれながらも、おどおどと店に入る恭子。

麗奈と竜が、二人の続く。 竜が進み出て、

「予約した上杉だ」

田村は驚きのあまり、『恭子ちゃん！』と口から出そうになる言葉、辛うじて飲み込んだ。

「はい、お待ちしております。上杉様」

と喋りながらも、見開かれたその目は、恭子しか見ていない。

『何で一緒なの！ どういう繋がり！』

そう聞きたくてしかたがない。

だが、上杉を目の前にして、余計な事は聞けない。

頭の中で、『なんで』を繰り返しながら、恭子達を案内する。

恭子は、ホールスタッフと店長の驚きの視線を避け、小さくなっていた。

初日ビール事件の話は、恭子も聞いて知っていた。

竜が店に予約をした時に聞こえた翔の名字、上杉。その後、創作花膳の事を調べている二人に気を取られ、すぐにはピンと来なかった。だが、どこかで聞き覚えのある名字、上杉。じわじわと思い出し結びついた。

『この組み合わせ驚くよね』

みんなの視線が痛い。そんなふうに感じながら歩いていた時。

「あつ、恭子ちゃん。いらっしやい」

アルバイトの一人が無邪気に声をかけた。険しい表情をした店長含めて、5人同時に立ち止まり振り返る。

『空気読め!』

店長の目が訴えている。

翔、麗奈、竜、恭子に、無言で見つめ返され、たじろぐアルバイト。二歩下がって『失礼しました』と言ってしょんぼりと下を向いた。

冷えていた場がさらに冷えて、妙な緊張感が漂う。四人は、テーブル席を抜けて奥の個室に向かう。

人目を惹く、麗奈と竜と翔。漂う危険なオーラ。そこにちょこんと混じる恭子。その怪しい4人組が側を通ると、客は皆視線を避けて黙る。

がやがやと賑わっていた店内が静まっていく。

4人が個室に消えると、絞っていたボリュームのレベルを上げるように歓談の声が戻った。

「こちらでございます」

田村は、個室の扉を開け、それぞれが席に着くのを待つ。

「お飲み物はいかがいたしましょう」

「ビール。瓶な、5本」 竜が答える。

「かしこまりました。皆様、ビールでよろしいですか」
忘れられない顔が、そこにある。

「ああ。お前も飲むなら、グラス5つ持ってこい。飲ませてやる」
「ありがとうございます。仕事中ですので遠慮させていただきます」
頭から流れるビールの感触が蘇る

「つまみは、お薦めを持ってこい」
「かしこまりました。では、ごゆっくり。失礼いたします」

内心では、無理難題を、押し付けられはしないかと思っていたが、
無用の心配だった。

ホッとして下がろうとすると、翔が、

「後で店長呼んでくれ。話がある」

思わず、ぎよっとして頭を上げる。

「私が、そうですが……」

「お前がそうか。小一時間経ったら来てくれ」

「はいっ。かしこまりました。すぐにお飲物とお料理をお持ちします。失礼します」 いったい何の用が？

頭の中で、答えを探しながら歩く田村。

席に案内する間に粗相が？ 否、無い……はずだ。

バイトの女の子が掛けた一言？ そんなことでは怒らないだろう。
だいいち怒っている印象はない。

なら一年前のビール事件。まさか、今さらあり得ない。あるなら
もっと前に、何かあったはずだ。

だったら何だ？

いったい何だ？

途中、お客に呼び止められ、はっとする。

上の空で聞いている自分に気付き、『仕事に集中しろ』とに言い
聞かせる。だが、出来ない。

気になるのは、やはり恭子。翔の話は、恭子に関係がある。だと

したら……。

運ばれてきたビール。皆に注ごうとする恭子を制した翔。

「今日の主役は、恭子だ。最初一杯は俺が注ごう」

恭子、そして皆にビールが注がれて、

「恭子に乾杯だ」

翔の音頭で乾杯。4人がグラスを空ける。

固めの盃。そんな雰囲気ではなく、和やかな乾杯。

翔が、何か喋りだそうとした時、『くうう』と、ビールに刺激された、恭子の腹が鳴った。

翔、竜、麗奈は顔を見合せて笑う。その笑顔のまま、翔は言う。

「竜、お前ちゃんと飯食わせたんだろうな」

「すみません。忘れてました」

「バカ野郎。飢え死にさせる気か」

「すみません」

自身の腹が鳴って、真っ赤な顔をしていた恭子。

「あたしが寝ていたからです。だから、竜さんは悪くないです」

竜をかばうつもりで、口をはさんだ。

「いや駄目だ。後でけじめつけさせる」

意味ありげに、翔は言う。

「はい、分かりました」 と竜。

その後、翔は、この店のお薦めは何だとか、店長が恭子を見る目が妖しいとか、料理を運んで来た女の子に『可愛いねえ。俺の女にならないか？ 恭子みたいに』などと軽口をたたき、陽気に飲んでいる。

翔の言うことに、一々、紅くなったり、ビックリしたりする恭子をつまみに、場は盛り上がった。

麗奈も、恭子を構いたくてウズウズしていた。「恭子。あんた店長と、何かあったでしょう？」 店長が恭子を見る目に、何かを感じ

じていたかのように、恭子を覗き込みながら聞く。

凶星を打たれた恭子。かまを掛けられているとも知らず、本当のことを喋り出した。

「あの、その……、確かに店長とはちょっと、ありました。お店の飲み会の後、何となく……。ただ社内恋愛みたいなのが嫌で、最後まで……。地震のせいで暇になって、誰か休みにするなら、あたしでも良いよ。なんてことも言いました」

素直すぎる返答に、驚いた麗奈。

「あらっ！ 本当だったの？ 冗談で聞いたのよ」
そう言って笑いだした。

恭子の頬が、みるみる赤く染まっていく。
それを見た翔は、

「なんとも健気じゃねえか、恭子って女は。なあ、竜」

「まったくです。あの野郎、締め上げるネタが増えました」
竜の答えに驚いた恭子。

「締め上げるって、店長をですか」
目を真ん丸くして、翔に聞く。

「そうだ。そのために来たんじゃないか。竜がきっちり話つけるから。なあ」

「はい。任せて下さい。飢え死にさせかけた分も入れて、きっちり遣ります」

余裕の表情を浮かべて、恭子を見る。

「恭子は、今日でこの店辞める。だろ？」

恭子は、明日からの生活を再認識してから、元気な返事をした。
「はい」

「退職金、たんまり貰ってやるから、楽しみにしてな」

時計を見た翔は、気だるそうに言う。

「さっさと終わらせるか」

竜は、店長を呼んだ。

ホールスタッフの間では、恭子が上杉の女らしい。という話が、驚きと共に囁かれていた。

田村の耳にも届き、ますます動揺していた。時計ばかり見て、落ち着かない。

何事もうわの空で、仕事が手につかない。

「どうしたんですか？」と心配して声をかけるスタッフに、

「上杉様に、後で来いと言われた」と話すと、

「なんかヤバそうですね」

そう言って、皆離れていく。

不安と恐怖。恭子の存在が重くのし掛かる。

上杉達が来て、40分ほど経った頃、

「店長。29番の上杉様がお呼びです」

田村は、恨めしそうに時計を見ながら、

「はい。分かりました」

返事をした。

呼ばれたからには、待たせるわけにはいかない。行かなければ。気持ちとは裏腹に、足は重い。

田村は、二ヶ月ほど前にした、店の飲み会を思い出していた。

二次会の後に、恭子を誘った。

あの夜の事を責められるのか？

だとしたら、どうなる？

相手はやくざ。恭子はその女らしい。

金。暴力。それ以外、何の想像も出来ない。

『でも、喋っていないよね、あの夜のことは……』と、願わずにはいられなかった。

更に、ここ最近。恭子の言葉に甘えて、突然の休みを告げる、度

重なる電話。

埋め合わせをしなくては。と思っではいたが……。

個室の扉が目の前に迫る。緊張と渴いた喉で、うまく声がでない。唾を飲み込み、咳払い一つしてからノックする。

「失礼します」

やっと声を出した。

個室に入る。

「おひよ……、失礼しました。お呼びでしょうか」

すっとんきょうな声を出し、4人の視線にさらされる。

翔、竜、麗奈、恭子と順に目を滑らすが、どの顔も直視できず、俯いてしまう。

「おお、忙しいのに悪いな。もうちょっとこっちに来い」
竜が手招きをする。

「はい」

ぎこちなく歩き、竜のそばに立った。

「なんだお前、具合でも悪いのか？」

「いえ、だ、大丈夫です」

「そうは見えねえがな、まあいい。先ず、うちの恭子から話があるなっ！ 恭子」 視線を恭子に移す竜。

『えっ？ うちの恭子？ うちの恭子ってどういう意味だ？ 恭子ちゃんはやくざの……』

恐る恐る、田村も恭子を見る。

恭子は、ひと呼吸おいてから、

「店長、あたしをクビにして下さい！ お願いします」

『ええっ！ いきなり何を言い出すんだ』

恭子の目は真剣だ。まっすぐ田村に向かってきている。

「ク、クビだなんて……」

「おい、お前。自分の胸に手当てて、良く考えてから物喋れよ」と竜。

「はい……。ですが、クビだなんて」

「恭子の最後のお願いだ。聞いてくれるよな」

竜の表情に、陰しさはない。

所詮、雇われ店長の田村。アルバイトといえども、クビに出来る権限はない。「心配すんな。クビにしたからって、お前に何だかんだ言わねえから。ひと言、クビだって言ってくれりゃあいいんだ」

気軽なお願いをするような竜。しかし、その後、

「まあ、無理には頼まねえがな」

と言って、田村を睨む。

その目つきに、ぞくりとする。更に竜は、

「俺達みたいなのが、毎日毎日ここに来たらどうなる？ 今日個室だな。ホールのど真ん中で、ビール一杯で、開店から閉店までニコリとしねえで、踏ん反り返って座ってたらどうなる？」

想像してみろ、と田村を見る竜。

簡単に想像出来た。

ひと時の憩いを求めて入った居酒屋に、物言わぬ、人相の悪い男達が、真ん中に陣取っている。頼んだものは飲まない、食わない。そして、喋らない。ただ静かに、そこに居る。

それが毎日。

「それは、困ります」

田村の返答に、うんうんと頷いた竜。

「恭子が居なくなれば、そんなことは起きない。だから、やむ無く辞めてもらった。それで良いだろう、なあ、店長。それとも、婦女暴行、強姦、傷害。どれかで訴えられてみるか？ どっちが良い？」

竜は、煙草を挟んだ手で、グラスを弄んでいる。

「お店のためには、恭子さんに辞めてもらった方が良いかと……」

「じゃあ、恭子のクビは決まりだな」

どう言おうと、そこにたどり着く話なのだ。

そして、常につき纏う暴力の恐怖に、田村は無言の肯定をした。

竜はグラスを置き、煙草を揉み消すと、

「うん、そこで話がある。先ずは店長、お前だ。うちの恭子弄んだ

落とし前、つけてもらうぜ」

やっぱり……。絵にかいたような展開。

「それとな、社長に電話しろ。店で使ってるアルバイトのことで、やくざに絡まれています。大至急来てくれ。そう言ってな」

更に竜は続ける。

「なんなら、警察連れてきてもいいんだぜ」

不敵に竜が笑った。

すぐに動き出せないでいる田村。それを見た竜は、語気を強めて捲し立てる。

「早く社長に電話しろ。近くに居ることは調べてある。唐津興産社長、三宅俊夫。住所は世田谷区池尻4ー〇ーX。家族構成は面倒だからはしよる。女が吉祥寺に住んでるな。都内に15店舗の、和伊米料理を取り混ぜた居酒屋を展開。一昨年の決算は2,025万円の黒字。従業員数102人。もっと喋ろうか」

竜は、恭子に対する田村の行動を、責めに来ているだけではなさそうだ。

田村は、スイッチが入った様に動き出した。

「はい！　すぐに電話します」

「俺が何も知らないで来たと思うなよ」

竜の言葉に頭を下げながら、携帯を耳にあてる田村。

「花膳の田村です。お疲れ様です。実は、今うちの従業員のことで、あの、その……はい、すみません。実はやくざに絡まれてまして、すぐに社長を呼べと。………はい、でも社長が近くに居ることは知っていると。………はい、少しお待ちください」

携帯を握りしめながら竜に、

「込み入ったお話なら、後日改めて伺いたいと申していますが」

「なに大物ぶって惚けたこと言ってるんだか。ちょっと貸せ」

竜は、携帯を受けとると、いきなり、

「三宅さん、あんた自分の店全部潰す気かい？」

突飛な言葉に驚いたが、余裕を持って切り返す三宅。

「なにを馬鹿なことを言っているんです。少し酔っているんじゃないですか。出来もしないことを言っても無駄です。警察呼びますからね。いいですね」

『自分はやくざだ』などと語り、飲み代をたかる輩もいる。三宅はため息をついた。

「呼びたいなら呼べ。今サツが来たって、何にも出来ないぜ。俺は何もしてないからな」

「何を言っているですか。自分はやくざで、しかも全部の店を潰すと、言っているじゃないですか」

まったく、やくざだと言えば、誰でもビビると思っている。うちの田村も困ったもんだ、店長失格だな。

「ああ、俺は間違いなくやくざだ。でも間違えるなよ、潰すのは俺じゃない。あんたの頼みの警察だ。正確には裁判所の判決だがな」

「馬鹿な。あり得ないですよ。裁判所がやくざの味方なんて、するわけがない。私の会社は善良な会社だ。潰されるわけがない」

こいつは気違いだ。放っておけばいい。三宅は確信した。

「あんたがそう言うなら、それでいいさ。でもな、明日か明後日か、お宅の全店舗の店長は、所轄に呼び出し食らうことになるかもな。」

全店舗起訴。なんてことになったら、大変だろうな。そんな時は、社長のアんたも起訴される。忙しくなるな。それとな、三宅さん。あんたの舐めた物言い、忘れねえぜ」

竜は、電話を切った。

「お前も、物分かりが悪い社長の下で働くと、大変だな。5分経ったらまた来い」

竜は、田村を追い出してから、電話をかけた。

「俺だ。唐津興産の店、全部行け。未成年だけでな。未成年者だと分かるようにして飲め。暫く飲んだら、必ず俺に電話を入れさせろ。いいか必ずだぞ。俺が『よし』と言ったら、店の中で適当に騒いで

印象付けてから、外で喧嘩しろ。店の品、何一つ傷つけるな。内輪で喧嘩してりゃあいい、派手にな。他人は巻き込むな。そして、必ずサツに捕まれ。余計なことは喋るな。分かったな」

竜が何をしたいのか分からず、きょとんとしている恭子。

「大丈夫だ。この馬鹿社長、そのうち真っ青になって飛んで来るさ」

再び店長を呼んだ。

個室に戻った田村。

恭子にしたことで、一方的に責められると思っていたが、事態は意外な方向に進み出した。

世間話でもするように、田村に話し掛ける竜。

「お前んところも商売だから、色々な客が来るだろう」

「はい、来ます」

「明らかに、未成年てのも来るだろう。そういう時はどうしてる」

「見て見ぬ振り、といえますか。実際のところ分かりません。未成年かもしれないと思うだけで、特別何もしません」

「どこでもそんなもんだ。でも、そいつらがお巡りに捕まったら、どうなるか知ってるか」

「いえ、知りません」

「意外に厄介なんだ、これが。未成年と知っていて飲ませた場合な、50万以下の罰金だ。但し、店にじゃない。営業者、それを代行する者、酒類の提供者。それぞれに課せられる」

「はいっ？」

首を傾げる田村。

「場合によっちゃ、店の全員が罰金払うってことだ。まあそれは無い。営業者は社長。代行者は店長。酒運ぶのは店員。この3人だな。一店舗で150万の罰金だ。分かったか」「そんなに払うんですか。会社が払うんですか？」

「罰金の意味が、分からんか。困った坊主だ。もう一回言うから、

覚えておけ。店長だろ、お前は」

「はい」

「お前は、法律でいうところの、営業を代行する者だ。罰金はその代行者にも課せられる。つまりお前が払うもので、前科者になるってことだ」

「えっ！ そんな馬鹿な！ 未成年だなんて分からないし」

「だから、知っていた場合と言っているだろう。だが、確認業務を怠ったと取られるな。コンビニで、ピーピーうるさく『年齢確認』というレジも、同じことだ。あれは、未成年に売らないためと、自分を守るためだ」

「ということは……」

「そいつらが捕まれば、店は逃げられん。唐津興産は、15店舗あるな。仮に、全部の店でこの事件が起きたらどうなる。罰金は幾らになる？ 2250万だな。社長だけでも750万払う勘定だ」

「でも、全店舗になんて起こらないです……よね」

「さあな。明日のことは分からん」

ビールを飲み干して続ける竜

「利益上げてる会社だ、そのぐらいは払えるだろう。だがな、話はそれで終りじゃない。営業停止も一緒に来る。食中毒で3日間、なんて生易しいもんじゃない。どの位だと思う」

「1週間か10日位ですか？」

「4ヶ月。ケースバイケースだがな」

「ええっ！ そんなに！ お店潰れます」

「ああ潰れる。間違いなく潰れる、会社がな。罰金払った上に、4ヶ月収入が無いわけだからな。抱えてる従業員はどうなる？ 店長、お前の生活はどうなる」

沈黙する田村。

竜が、続ける。

「今日、唐津興産の店で、未成年が飲んで居ないことを祈るぜ。まあ、飲んでも、捕まらなければいい話だが」

「まさか……。あなた達」

「おい、何が言いたい」

ゆっくり立ち上がって、竜が田村を睨む。一步、二歩と近づく。

「あつ、いえ……。すみません。すみません」

後退りした、田村の目の前に立つ竜。

「今、ここに居る俺に、何が出来る？ 言ってみろ」

「はい、すみません。何も出来ないです。すみません」 竜は席に

戻りながら、

「そうだろ。ただ、悪い予感がする。お前んとこの社長、思い上がってるみてえだからな。何か、バチでも当たるんじゃないかと、俺は心配だぜ。今夜あたり、危なそうな予感がする。店の様子、見てきたほうが良いかもな」

「はい？」

「未成年には、気をつけろ。特に今夜はな。他の店にも、電話した方が良いかもな。まあ、店の中、見回り行ってこい」

竜は、手振りで田村を追い払った。

個室を出た田村は、テーブル席を見回し、若そうなお客を眺めた。さっきまでは、意識していなかったお客まで、未成年に見えてくる。

来たばかりらしい、男2人女1人の、3人組のお客に目が止まった。 竜の話を聞いてから、若そうなお客は、全部未成年に見えるが、そのお客には、確信できる何かを感じる。

ゆっくりと、テーブルに近づく。

飲みかけの生ビール2つ、梅酒と思われるグラス1つ。お通しが3つ。

何故か、免許証が2枚、無造作に置かれている。

書かれている文字を読み取ろうと、目を凝らす。すると、

「ねえ、田村さん。注文お願い」

声の主の女を見る。女は、田村の名札を見ている。そのあどけな

い表情と、みずみずしい肌。大人ぶった服装はしているが、子供が発する可愛さが抜けていない。

注文を受け、下がる途中。

『何故、免許証をテーブルの上に?』

疑問を感じた田村。

そうだ! 彼等は提示したんだ。

身分証を提示したんだ。

しまった!

年齢確認をしようと、すぐに戻った田村。

テーブルの上には、免許証は無かった。

恐る恐る、お願いをする。

「誠に畏れ入りますが、年齢の確認を、させて頂きたいのですが」

「そう言われると思って、さっき出しといた。あんた見たろ」

「はい、そうなんです。なんとかもう一度……」

「しらせる店だぜ、まったく。おいっ! 帰ろうぜ」

「ああっ、お待ちください。大変失礼いたしました。どうか、お座

りになって、ゆっくりなさって下さい」

「なんだよ、居ていいのかよ。だったら、ごちやごちや言うな」

浮かせた腰を落着けた3人。

田村は、お詫びして下がった。

既に酒は飲んでいる。このまま帰して、外で問題でも起こされたら、取り返しのつかないことになる。

現に、起こしそうな雰囲気を持っている3人。

これは、竜の罠なのか?

だとしたら。

まさか他の店でも……。

さっき、竜の忠告にもあった。

念のために、聞いてみよう。いや、聞かなければ!

田村は、ホールにいる社員を捕まえて、告げる。

「これから、私は居ないものだと思ってくれ」

きよとんとする相手を見捨て、田村は携帯を握り外に出た。

梅雨時期の今。冷房が少し効いた店内から外に出ると、ムンとする。

走り去る車の音が、通話の邪魔をする。

「そっちの店に、未成年だと思うお客は来ていないかい？」

大声で話す田村。

「今忙しいんだ。いちいち気にしてない。そんなことで、電話してくるなよ！」

姉妹店の店長は、機嫌が悪い。しかし、田村は構わずに続ける。

「何かしら、身分証を見せたお客は居なかったかな？ 大事なことになるんだ！」

田村の強い口調に、そう言えば、と言って返事が返ってきた。

「さっき来たばかりのお客が、免許取ったから見てくれって、騒いでいたよ。免許証チラチラさせてさ、可愛いじゃない」

「年齢確認はした？」

「してないよ。面倒臭いし、お客さん嫌がるじゃん。忙しいから切る。話があるなら、後で」

電話は切れた。

どうやら、うちだけじゃないらしい。

さらに、別の店の店長に電話を入れる。なかなか出ない、諦めて次に。

「花膳の田村です」

「何、この忙しい時に」

「身分証を提示した、未成年らしいお客はいるかい？」

「はあ、何言ってるの。それが何か？ 忙しいんですけど」

「悪い、居るか居ないか、教えて欲しい」

「居るよ。身分証なんて提示してないけど。大学生が合コンしてる。城盛大一回生の何とがですって、でかい声で自己紹介してるからうるさくて。ほんの少し前に来たよ」

「年齢確認はしたかい」

「するわけないでしょ。いつものことなんだから」

「分かった。どうもありがとう」

大学生の合コン。違いかもしれない。でもタイミングが怪しい。

田村の携帯が鳴った。さっき出なかった店長だ。

「もしもし、花田です。電話くれたけど、どうしたの？」

「忙しいのに申し訳ない。身分証を提示したお客はいるかい？」

「いきなり何だよ。……提示じゃないけど。テーブルの上に免許証置いてたお客は居るよ。自分が見たからね」

「年齢確認はしたかい」

「してない。悪い、また後で」

切れた。間違いない。うちを入れて、3軒の店で免許証を見せている。

偶然なんて。あり得ない。普段そんなことする客はまず居ない。明らかに意図を感じる。もう他の店に聞くまでもない。早く社長に電話しなくては……。だが待て、念のために、もう一軒だけ。社長に納得してもらうために。

次の店の店長は、すぐに電話に出た。

「ああ、柄の悪い6人組が来てるよ。近くの店で、未成年だから断られた。この店も、そんなウザいこと言うのか？　なんなら免許証見せようか。正真正銘の未成年だぜ。って言って、入ってきたのがあるよ。売上げ欲しいじゃん。聞かなかったことにしますって、入れちゃったよ」

最悪だ。

早く、社長に電話しよう。

携帯を握り締めていた手には、じつとりと汗が。

頬から伝わる、熱と汗で、携帯も湿っぽく、ぬるっとする。

早く知らせないと大変なことになる。

焦る気持ちは指に伝わらず、関係のないボタンを押してしまう。

「あぁっ、くそっ、なにやってんだ」

ズボンに手を擦り付け、再度、あぶら汗に濡れたボタンを押す。

電話が繋がった。

「度々すみません、花膳の田村です」

「なんだね」

機嫌が悪い。

「実は、先程の件で……」

「まだそんな事を言っているのか君は！ 店長失格だぞ」

田村は、声を張り上げた。

「店長失格でもいいです！ いいですから聞いて下さい！ お願いします！」

田村の大声に驚いた三宅。

「……うん？ あの後、何かあったのか」

「はい、ありました。今夜、未成年のお客には、気をつけろと言われました」

まだ、声の大きい田村。

「意味が分からないが」

「それが、たぶん全店舗に来てるんです。免許証をわざと見せているようで。自分から未成年だと言って、入ってきたお客もいます。もう、お酒も飲んでいます。お店出た後、警察に捕まったら大変なことになります。だから社長、すぐに花膳に来てあの人の話を聞いて下さい。お願いしますから来て下さい！ お願いします！」

「落ち着け！ 田村。君が言っているのは、未成年者飲酒禁止法のことか？」

「法律の名前なんか分かりません。でも来てるんです、うちの店全部に。わざわざ免許証見せるお客なんて居ません、何かあります。絶対あります。今来ているのが全員捕まったら、お店潰れます。もう飲んでます、どうしようも出来ません。お願いします、社長。助

けて下さい」

「ちょっと待て。そのお客に、年齢確認はしたんだろうな。マニュアルにもあるだろう」

「そんなこと、いちいちしてたら、若いお客さん全部来なくなりま
す。売上目標なんて、到底届きません。それよりどうするんですか、
社長！ 早く来て下さい」

田村は、今すぐ社長に来て欲しい。それだけだった。

三宅は、事態を甘く見ていた。放って置いても問題ない。田村が
解決すべき事だと思っていた。だいたい、店を全部潰すなんて話を、
信じる馬鹿はいない。

ところが、どうも様子が違う。悪意を感じる、何かがある。

未成年者飲酒禁止法は、経営者として当然知っている。知り合い
から聞いたこともある。

あの時は確か……。罰金が、経営者、店長、店員にそれぞれ20
万で計60万。営業停止4ヶ月。

4ヶ月！ まずい！

知り合いの店は、営業再開を断念して、即、店を閉めた。まずい！
あのやくざの言葉と、田村が取り乱して話す内容が、結びついた。
しかも全店舗！

なんとしても、止めなければ。

「分かった、田村。あのお客様に、すぐに行くと言えなさい。すぐ
に来ますから、お待ちくださいと。どうかお待ち下さいと、丁重に
伝えてくれ。頼んだぞ」

「はい、分かりま……」 三宅は、それだけ聞くと、携帯を放り投
げ、上着を引っかけた。投げた携帯を拾い、車に急ぐ。キーを差
すのももどかしく、コツンコツンと、あらぬ場所をキーで突つつく。
やっに入り、エンジンをかける。

落ち着け、と言いつつも、深呼吸した。

三宅は、知り合いの刑事に、電話をかけた。

「はい、分かりました。すぐに伝えます」

途中で、大きな雑音が聞こえ、思わず耳から携帯を離れた田村。

「もしもし、もしもし……社長!……」

返事がないが、構っている場合ではない。急いで店に戻り、個室に走る。

途中でお客に声をかけられたが、無視した。

免許証を提示した3人組が、脳裏を過る。だが、既に問題はそこに無い。遠慮なしのノックをして、個室のドアノブに手をかけて返事を待つ。

「入っていいぞ」

のんびりとした声がする。

「失礼します」

ややひきつった表情、息も荒い田村。

「どうした、青い顔して」

竜が、からかうように聞く。

「はい、あの、うちの社長がすぐに参ります。それまで、どうかお待ち頂けないでしょうか」

「こういう風の吹き回しか知らんが、いいぜ」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃ、その前に、お前の話をするか」

お辞儀をして、個室を去る気でいた田村。

きょとんとした顔で、竜を見る。

「お前が、うちの恭子にしてくれたことだよ」

未成年に気を取られ、忘れていたことを、突き付けられた。どう返答して良いのか分からない田村。

「黙るってことは、引け目感じてるわけだな。なら話は早い、どう償ってくれるんだ、店長さん」

逆らうことは無意味だ、と本能が告げる。

今夜の出来事が、周到に用意されたことなのか、そうでないのか

は、分からない。しかし、大きな力を感じる。素直になろう、心の中であんなに眩しい。

「はい、私としましても心苦しい思いでした。会社の指示でしたこととはいえ、恭子さんに甘えていたことは確かです。埋め合わせをしなくては、と思っていましたが。実際に、どう償うかと聞かれると、正直分かりません。どうしたらよろしいでしょうか」

「なかなか素直でいい。お前、気に入ったよ。で、何回、恭子に休みの電話入れた？」「15回くらい、かと思っています。シフトを見れば、正確な回数は分かります」

「それ調べて、1日24時間分の給料を払ってやれ。色着けてな」
1日24時間分！ そんなに！ 多すぎる。でも、貯えなら多少ある。なんとかなるだろう。

「はい、分かりました。恥ずかしながら伺います。色はどのように着けたらよろしいでしょうか」

「甘ったれんな、馬鹿野郎！」

音をたてて、椅子がひっくり返る。あつという間に、竜が目の前に迫る。胸ぐらを掴まれ、ぐいっと引き寄せられた。

殴られると思い、身を固くして目をつぶる。

なかなか来ない。恐る恐る目を開けた時に、腹を打たれた。

ぐはっと息を吐き、惨めに崩れ落ちる。胃から込み上げて来るものを必死で堪え、なんとか立ち上がる。腹をおさえ、涙目で竜を見る。

「もう少し、いたぶってやりたいところだが、お前の素直さに免じて、許してやる」

竜は、倒れた椅子を直して座る。

「お前は正社員だろ」

「はい」

腹には、竜の拳の感覚が残っている。鉛の玉が食い込んでいるように、吐き気が収まらない。

「お前の給料は、会社が責任を持っているわけだ、福利厚生も含め

てな。だが、恭子は違う。同じ会社に採用されても、日雇い労働者だ。電話一本で休みにされ、明日の生活を、常に心配しながら生きてるんだぜ。お前は、この居酒屋を守るために、恭子を休みにしたわけじゃねえだろう。自分を守るためだろう。違うか」

返す言葉はない。すべては会社のせい、景気のせい。自分がどうこうできる力はない。立場上、仕方なくしていることだ。だから、保身じゃない。

説得力のない言い訳を胸に、恭子や、他のアルバイトに、急な休みを告げた。

最近では、痛む心が麻痺してきている。

「お前は、偉そうに店長面しながら、自分の心配しかしてねえんだよ。だから、これから1年、給料の半分を、恭子に払え」

「えっ！ それじゃ生活……」

「お前に、喋る資格はないんだよ。お前の電話が、どれだけ恭子を苦しめたか、お前は知らない。現に、恭子は昨日、体張って仕事したぜ。女が体張ったんだ、意味わかるな。てめえは、そこまで恭子を追いつ込んだ。そんなことも知らねえで、のうのうと店長面してやる。ましてや、恭子はうちの身内だ。てめえの安月給の半分くらいじゃ、組の金看板に、泥塗るようなもんだ。だがな、てめえみてえな甲斐性なしでも、償う気があるから、収めてやろうと言ってるんだよ。それとも、荒っぽいのが好きなら、そうしてやってもいいぜ。毎日毎日、顔腫らしてちゃ、仕事も出来ねえだろう。どうする？ 店長さんよ」

まだ痛む腹を押さえながら、田村は考える。

逆らったらどうなるか。なんてことは、想像したくない。

仕事が出来なくなる。なんて事も、想像したくない。

諦めよう。しかたないさ。俺はスーパーマンでも何でもない。どうしようもない。

1年は長いけど、我慢しよう。

「……はい。分かりました。給料の半分を、払います」

よし、と頷いた竜。金は、毎月末に恭子の口座に振り込め。そう言った後、

「お前は今、これから先1年間の、自分の生活を心配しただろう。給料の半分も払うのは、嫌だし、困るな。そして、ちゃんと暮らしていけるのか、不安だろう」

竜は一旦言葉を切り、田村をじっと見る。

俯く田村。

「それと同じ気持ちさを、恭子は味わった。お前のせいだな。それを忘れるな」

その通りだ。竜の言葉に、自分がしたことを、改めて、理不尽さと共に理解した。社長への反発心が膨らみ始めた。

田村の携帯が鳴る。

竜が、顎で出ろと促す。見ると社長からだ。

「はい、田村です。……はい、29番に居ます。……はい、分かりました」

ポケットに携帯をしまい「今社長が来ます」と告げた。

ノックされ「失礼します」と声がして、ドアが開く。

三宅は、長身で、胸板の厚い男を伴い、個室に入ってきた。

三宅は、挨拶もそこそこに、勝ち誇ったように、連れの男を紹介しようとした。

すると、その男は、旧知にばかり会ったような口ぶりで、翔に話しかけた。

「なんだ、上杉じゃねえか」

翔もにこやかに、言葉を返す。

「これはこれは、藤田の旦那。しばらくで」

二人の会話に、知り合い以上の、何かを感じた三宅。同時に、疎

外感を強く抱いた。

三宅は、連れてきた刑事の横顔を、きつく睨んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075x/>

まみれた命

2011年11月16日03時23分発行